

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

n i w a

瀬波



2026
第13号

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第13号

niwa

瀬波

目次

令和7年度活動記録

青塚古墳史跡公園	1
木之下城伝承館・堀部邸	2
歴史の里・しだみ古墳群	3
その他ニワ里ねっと自主事業	4
その他文化遺産関連受託事業	5
活動年表	6

研究論考

味蜂間と海部の海 海拔ゼロメートル地帯としての古代の風景 赤塚 次郎	8
--	---

『尾張名所図会』に描かれた「鳶岩」「箕岩」を訪ねて 望月 友恵	17
------------------------------------	----

赤色立体地図を活用した「瀬波」エリアの古墳踏査 ―新発見と再検討― 服部 哲也・近藤 健一・横井 誠	18
---	----

木曾街道「楽田追分道標」の今と昔 近藤 健一	28
---------------------------	----

犬山市・明治池古窯の踏査報告 兼松 泰弘	36
-------------------------	----

官林瓦窯採集遺物の整理と 二〇二五年度踏査成果報告 伊藤 佑真	40
---------------------------------------	----

昨年度のイベントチラシ	48
会員募集	49



青塚古墳史跡公園

活用・管理業務を犬山市より委託を受け実施。瀬波史楽座を2年ぶりに開催。多くの方に観覧いただいた。子ども向けには、夏休みに古墳のミニチュア作りワークショップや、年間を通して青塚子ども学芸員の活動を行った。青塚古墳を見守る会との協働で古墳草刈り活動を継続して実施するとともに、地域住民らとともに大垣市昼飯大塚古墳を見学した。

1. 瀬波史楽座・古代音楽絵巻第8章 天土風
2. 青塚子ども教室・青塚古墳のミニチュア模型を作ろう！
3. 小学校の青塚古墳見学
4. 青塚古墳まつり
5. 青塚古墳子ども学芸員
6. 草刈りボランティア活動



木之下城伝承館・堀部邸

堀部邸の蔵空間を生かし、「浅田稔絵画個展」を開催。トークショーなども同時に行った。「猪之子座」では毎年恒例となっている落語や講談、音楽コンサートを開催、琵琶演奏会では琵琶の演奏体験も行われた。冬には、東之宮古墳の鏡チョコワークショップを開催した。

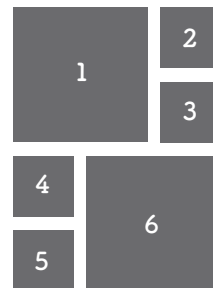
1. 猪之子座・上方落語 九雀亭 2. 「鏡チョコレート」を作ろう 3. 猪之子座・上方講談をたっぷり！
4. 猪之子座・年金トリオ一座公演 5. 企画展・浅田稔絵画個展 6. 猪之子座・琵琶演奏会



歴史の里・しだみ古墳群

「夜の音楽会 in しだみ古墳群」では大久手エリアの古墳群の前で歌やバイオリンなどの音楽を上演した。しだみゅー古墳散策は、熱田区や南区エリアの古墳を散策。歴史講演会には各方面から講師をお迎えし、特にしだみゅー歴史シンポジウムにはたくさんの方にご来場いただいた。夏休みと春休みにはしだみゅー子ども研究員養成講座を開催した。

1. 夜の音楽会 in しだみ古墳群 2. 子ども研究員養成講座 3. 歴史講座・お庭に埴輪プロジェクト
4. しだみゅー歴史シンポジウム「土器から考える古墳時代」 5. しだみゅー古墳散策 6. しだみゅー闇夜体験



ニワ里ねっと自主事業

令和7年度も引き続き岩倉街道をテーマにニワ里ウォーキングを実施。「入鹿切れ」講座は小牧市の施設で開催した。バスツアーでは奈良県桜井市や滋賀県守山市・野洲市などに出向いた。

1. ニワ里ウォーキング・岩倉街道を歩く 3. 江南・扶桑 2. ニワ里カレッジ・入鹿切れ一語りと読み聞かせで学ぶー 3. ニワ里カレッジ 4. 石上げ祭り参加 5. 栗栖地区発掘調査 6. ニワ里サイクリング・初夏の小川と田園と古墳と薬ぶき屋根の家をめざす 7. ニワ里バスツアー・桜井市 8. ニワ里ウォーキング・岩倉街道を歩く 4. 扶桑周辺 9. ニワ里バスツアー・野洲市





その他 文化遺産関連受託事業

自治体など委託を受け文化遺産関連事業を実施。犬山市では東之宮古墳にて土上げ祭ワークショップを実施、今年度が最終年度。子ども向けのワークショップも開催した。大垣市では大垣城や墨俣城の展示スペースにおいてパネル展示の作成を行った。

1. 【犬山市】歴史文化ぶらっとフォーム・街道ウォーキング in 善師野 2. 【犬山市】東之宮古墳ワークショップ・東之宮古墳のミニチュア模型を作ろう！ 3. 【犬山市】土上げ祭ワークショップ

1

3

2



12日：ニワ里カレッジ「研究紀要「瀬波」掲載論考の発表」
①古川博昭「犬山市内の名鉄線の移り変わり」・兼松泰弘「赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見—犬山市八曾地区を事例に—」②青塚古墳ガイダンス③14名

13日：ニワ里ウォーキング「江南の古墳歩き」
②江南市内③18名

19日：瀬波史楽座「古代音楽絵巻第8章 天土風」
①古代音楽劇集団「夢舞台」・中野包裕・長江希代子・沖牟田安・はにわ娘歌姫隊②青塚古墳③130名

25日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「古代の知多の塩づくり」
①楠美代子②しだみゅー③54名

26日：猪之子座「旭堂南海の上方講談をたっぷり11」
①旭堂南海②堀部邸③12名

27日：旭堂南海さん出前授業
①旭堂南海②蜂屋小学校③6年生

27日～令和8年1月31日：【大垣市】豊臣氏ゆかりの城企画 大垣城・墨俣一夜城展示パネル作成
②大垣城・墨俣城

11月

2日：猪之子座「上方落語九雀亭10」
①桂九雀②堀部邸③22名

4日：ニワ里サイクリング「木曾川の渡し船とその周辺」
①古川博昭③6名

8日：ニワ里ウォーキング「「岩倉街道界隈4」青木川源流と前刀の里」
②扶桑町周辺③12名

9日：「あつまれいぬやまっこ！うきうき大行進」参加
②犬山市民文化会館・南部公民館

9日：【名古屋市】しだみゅー秋まつり
②しだみゅー③2,699名

12～24日：「浅田稔絵画個展」
①浅田稔②堀部邸

14日：小学校出前授業「入鹿切れ」
①望月友恵②楽田小学校③4年生

16日：猪之子座「美しき日本の音楽コンサート」
①長江希代子②堀部邸③47名

22日：おもちゃの広場（おもちゃの図書館）青塚古墳見学会
②青塚古墳③11名

22日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「弥生の染織～朝日遺跡の弥生ムラぐらし～」
①松本彩②しだみゅー③39名

23日：トークライブコンサート
①浅田稔・中野包裕・ユニット LOVE NERD「チェロ：窪田翔椰、ピアノ：石黒和雅、カホン：吉田七海」②堀部邸③31名

24日：犬山市ボランティア連絡協議会「ボランティアのつどい」参加
②犬山市南部公民館

25・28日：小学校出前授業「上街道を歩く」
①服部哲也・望月友恵②楽田小周辺③3年生

30日：猪之子座「琵琶演奏会」
①野島洋美②堀部邸③60名

12月

3日～令和8年3月29日：企画展「地域に眠る文化遺産 in 栗栖」
②青塚古墳ガイダンス

6日：青塚古墳こども学芸員「古墳の楽しみ方を考えよう」
①服部哲也・望月友恵②青塚古墳③6名

14日：しめ縄ワークショップ
①岡部光顕、青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳ガイダンス③16組

20日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「古墳葬送儀礼の諸問題—食物儀礼を中心に」
①東海古墳時代研究会共催、松永悦枝ほか②しだみゅー③79名

1月

13日：【名経大】犬山学サロン

①望月友恵②名古屋経済大学③50名

24日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「コシキからみたミニチュア炊飯具形土器の実態」
①保谷里歩②しだみゅー③49名

25日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト（1回目）
②愛知県陶磁美術館③24名

2月

1日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト（2回目）
②しだみゅー③24名

7日：「鏡」チョコレートワークショップ
②堀部邸③11名

8日：みやげ話の会

①横井誠「群馬の古墳探訪」・服部哲也「八丈島」②青塚古墳ガイダンス③12名

14日：青塚古墳清掃ボランティア活動

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③51名

14日：青塚古墳子ども学芸員「古墳の草刈りに参加しよう」
①服部哲也・望月友恵②青塚古墳③5名

14日：ニワ里カレッジ「南国高知の古墳文化」
①長尾哲汰②青塚古墳ガイダンス③17名

21日：【犬山市】歴史文化ぶらっとフォーム「街道ウォーキング in 善師野」
①赤塚次郎②善師野周辺③36名

23日：【犬山市】東之宮古墳ワークショップ「東之宮古墳のミニチュア模型を作ろう！」
①赤塚次郎②犬山市役所③8名

28日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「故郷の川 ～木曾川を語る」
①久保禎子②しだみゅー③69名

3月

1日：【名古屋市】お庭に埴輪プロジェクト（3回目）
②しだみゅー③24名

4・5日：栗栖地区発掘調査
②栗栖地区③のべ8名

7日：ニワ里ウォーキング「栗栖の原風景を歩く」
②栗栖地区③14名

14日：ニワ里バスツアー「雲出の砂粒・アザカの里」
①和氣清章②嬉野町③19名

20日：【犬山市】東之宮古墳修復プロジェクト「土あげ祭」
①赤塚次郎・中野包裕・夢舞台ほか②東之宮古墳③31名

26日：【名古屋市】しだみゅー子ども研究員養成講座
①服部哲也②しだみゅー③3名

27日：青塚古墳見守る会研修会
①服部哲也②昼飯大塚古墳ほか③22名

28日：【名古屋市】しだみゅー歴史シンポジウム「土器から考える古墳時代」
①村木誠・長友朋子・森泰通②しだみゅー③98名

■そのほかの事業

5月 研究紀要「瀬波12号」発行

**5月～3月（隔月）
会員通信「さとの四季だより」86号～91号発行**

■管理・運営施設の年間入場者数

【犬山市】青塚古墳史跡公園入館者数
11,729名（昨年度12,453名）
校外学習17校（昨年度19校）合計1380名

【犬山市】木之下城伝承館・堀部邸入館者数
5,194名（昨年度4,957名）

【名古屋市】体感！しだみ古墳群ミュージアム入館者数
100,110名（昨年度110,345名）

■ご寄付

寄付総額：658,935円

（財）タイム技研社会貢献委員会様より斜面用草刈り機1台分、および個人会員様を含め、主に堀部邸・青塚ガイダンスでの寄付金

2025.4 ▶ 2026.3 令和7年度 活動年表

日にち：【委託市町村名】行事名・「タイトルなど」
①講師名（敬称略） ②開催場所 ③参加者数

青色：ニフ里ねっと自主事業・共催・協力事業
茶色：文化遺産関連受託事業

4月

6日～6月29日：写真展「青塚古墳近くの自然」

①田村裕三②青塚古墳ガイド

12日～5月11日：青塚古墳に鯉のぼり

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳

19日：ニフ里ウォーキング「岩倉街道を歩く3」

①赤塚次郎②柏森駅から江南駅③16名

25日：高校出前授業「蓮池古墳群」

①服部哲也・望月友恵・兼松泰弘②犬山総合高校③日本史専攻2・3年生

26日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「伊勢湾を囲む弥生土器」

①鈴木とよ江②しだみゅー③77名

5月

5日：青塚古墳清掃ボランティア活動

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③48名

6日：【名古屋市】しだみゅー春まつり

②しだみゅー③2,362名

11日：青塚古墳まつり

②青塚古墳③620名

17日：ニフ里ねっとと総会

②堀部邸

23日：ニフ里サイクリング「初夏の小川と田園と古墳と葉ぶき屋根の家をめざす」

①古川博昭②岐阜県大野町③9名

24日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「お酒とやきもの」

①花木ゆき乃②しだみゅー③61名

30日：大縣神社参拝

②大縣神社

31日・6月1日：【名古屋市】しだみゅー闇夜体験「夜の古墳案内」

①服部哲也②しだみゅー③10組

6月

7～21日：パネル展「入鹿切れ—語りと読み聞かせで学ぶ—」

②ゆう友せいぶ（小牧市西部コミュニティセンター）

8日：【名古屋市】しだみゅー古墳散策「高蔵古墳群と断夫山古墳」

①服部哲也②高蔵古墳群、断夫山古墳ほか③18名

14日：青塚古墳清掃ボランティア活動

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③22名

21日：ニフ里カレッジ「入鹿切れ—語りと読み聞かせで学ぶ—」

①中野裕裕・さくらの里かたつむり・道家晴規・望月友恵・山田久②ゆう友せいぶ（小牧市西部コミュニティセンター）

③42名

22日：しおんじやま学び場オンライン&文化遺産の世界「小さな展示館」再会企画「古墳の中心で、未来をさげぶ！～遺跡で語るこれからの文化遺産～」参加

①服部哲也②八尾市立しおんじやま古墳学習館

28日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「装飾須恵器を楽しむ」

①望月友恵②しだみゅー③71名

29日：猪之子座「年金トリオ一座公演」

①年金トリオ②堀部邸③47名

7月

1日～8月31日：企画展「古墳俳句展示」

①つれづれ句会②青塚古墳ガイド

5日：【名古屋市】愛知県陶磁美術館コラボ企画「埴輪にお花」

②しだみゅー③40名

11日：ニフ里バスツアー「伊勢遺跡と大岩山銅鐸（近江路）」

②滋賀県守山市・野洲市 ③17名

15日～8月31日：企画展「なにが違うの？犬山市内で作られた今と昔のお茶碗・お皿」

②青塚古墳ガイド

25日：出前授業「青塚古墳についての学習会と折り紙ワークショップ」

①望月友恵・兼松泰弘②楽田児童センター③7名

25日：小学校教師巡見「名城&断夫山」

①服部哲也②名古屋城、断夫山古墳③16名

26日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「方形周溝墓からみた朝日遺跡の方位観」

①白川美冬②しだみゅー③74名

30日：【名古屋市】しだみゅー子ども研究員養成講座

①服部哲也②しだみゅー③11名

8月

2日：青塚古墳子ども学芸員「青塚古墳を見学しよう」

①望月友恵②青塚古墳③5名

3日：石上げ祭参加

②尾張富士大宮浅間神社③15名

6日：【名古屋市】しだみゅー子ども研究員養成講座

①服部哲也②しだみゅー③11名

10日：ニフ里カレッジ

①伊藤佑真「犬山市の古代瓦とその周辺」・小出一磨「織豊期城郭瓦を見る視点」②青塚古墳ガイド③14名

20日：青塚子ども教室「青塚古墳を見学しよう！」

①望月友恵②青塚古墳③7名

23日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「令和の調査からみえてきた弘法山古墳のすがた」

①小山奈津実②しだみゅー③80名

24日：青塚子ども教室「青塚古墳のミニチュア模型を作ろう！」

①兼松泰弘②青塚古墳③8名

30日：【名古屋市】夜の音楽会 in しだみ古墳群7「天空のテノール」

①包金鐘・伊藤明日香・石橋まり子・ウンドス②しだみゅー③360名

9月

6日：考古学落語会「桂九雀となごや西区の古代遺跡」

①桂九雀②名古屋市西文化小劇場③223名

9日～10月13日：史楽座写真展

①中野耕司②青塚古墳ガイド

14日：青塚古墳清掃ボランティア活動

①青塚古墳を見守る会共催②青塚古墳③26名

19日：小学校出前授業「楽田城を歩く」

①服部哲也・望月友恵②楽田小周辺③6年生

23日：マルシェ「犬山線ふれんず」出店

②Home & nico ホール（江南市民文化会館）③60名

27日：考古学研究会東海例会への協賛

②名古屋大学

27日：【名古屋市】しだみゅー歴史講演会「丹後における巨大前方後円墳出現の過程」

①高野陽子②しだみゅー③93名

10月

4日：青塚古墳子ども学芸員「犬山市内の古墳を見に行こう」

①望月友恵②東之宮古墳③9名

4日：青塚古墳墓前祭

①大縣神社②青塚古墳

8日：ニフ里バスツアー「忍阪・磐余」巨石横穴式石室を巡る」

②奈良県桜井市③18名

11日：【名古屋市】しだみゅー史跡散策「南区の古墳と見晴台遺跡」

①服部哲也②見晴台遺跡ほか③13名

味蜂間と海部の海 海拔ゼロメートル地帯としての古代の風景

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

赤塚 次郎

1. はじめに

木曾三川が流れ落ちる濃尾平野、美濃・尾張の国境を含め木曾川の流れて翻弄される人々の生活がそこにある。それは現在の海拔ゼロメートル地帯に広がる広大な平野部、濃尾平野を代表する景観でもあった。しかしそのゼロメートル地帯に生きた先人たちの歴史を紐解くには、現状においてあらゆる点で資料不足と言えよう。にもかかわらず歴史の舞台として度々登場し、重要な場面として描かれ、伝承が生み出されてきたことは紛れもない事実でもある。壬申の乱・墨俣一夜城などその代表的な出来事であろう。では海拔ゼロに生きる古代の風景まで遡って行くと、どのような景色が見えてくるのであろうか。ここでは後に「美濃国安八郡」・「尾張国海部郡」とされる海拔ゼロメートル

ル地帯を一つの領域とみなし、その具体像を整理することにした。対象とする時代は、この空域の遺跡が具体的に語り始める「弥生時代末期から古墳時代」に絞り込む。かつてこの木曾三川が流れおち、伊勢湾の海とどう場面に広大な湿原・浅瀬を交えた海が広がっており、それを「味蜂間の海」と呼んだ経緯があり（赤塚1992）、ここでもそれを踏襲したい。つまり味蜂間の海と海部に住む人々のはじまりの歴史でもある。

2. 味蜂間の海

現在の地形図を見ていくと、濃尾平野のど真ん中を木曾本流が流れている。その西には長良川が、そして揖斐川が養老山系との間に流れる。木曾川を挟んで東側が尾張国であり反対側が美濃国となる。木曾三川が養老山系側に寄り添うのは濃尾平野

の成り立ちと大きく関わり、養老断層よって創り出された景観と評価されている。また木曾本流の流れが今日の姿になっていくのは天正地震（天正13年）と天正期の洪水（天正14年・1586年）が契機と想定されている。いずれにしろ濃尾平野が養老山系に向かって大きく傾斜する地形に応じて、川の堆積を伴い複雑な地形を形作ってきた。したがって海拔ゼロメートルのラインは尾張国津島から大きく北側に回り込み、現在の大垣市南部にいたるも湿原が続いていたと想定できる。この伊勢湾最北部の海岸風景は大きく二つに分でき、一つはゼロメートル地帯に浮かぶいくつかの微高地、浜堤を含めた景観を「シマ」と呼び、海部郡南部に広がる。今ひとつが養老山系から大垣市南部に大きく入り込む入江状の湾が存在し、これを味蜂間の海と呼んだ。緩慢の差が激しい浅瀬や湿原が周囲に大きく広がっていたものと推測できよう。この海部浜堤や味蜂間の海の海岸部を復元するには、この領域に住む人々の痕跡、すなわち遺跡分布を手がかりにすることにより大枠が見えてくる。同時にこの地のはじまりの

歴史をぼんやりとではあるが俯瞰できる。ここでは具体的に弥生時代末期から古墳時代の遺跡分布を基本にして、その手がかりから出発してみたい。

3. 海人の世界

味蜂間の海は現在の地名では大垣市・養老町・輪之内町・海津市域を含む。美濃国としては多藝郡・安八郡の領域であり、海津市が所属する石津郡は855年多藝郡より、また揖斐川流域池田郡は安八郡より、遅くとも9世紀初頭に建郡と考えられている（所監修1989）。安八郡は味蜂間評より改名されたものであり、今回対象となる範囲は多藝郡・安八郡が基軸である点は動かない。ただし多藝郡域は養老山系から流れ落ちる小谷による扇状地形の連続が基本であり、その風景は趣を異にする。また味蜂間の海の東側は尾張国海部郡が広がっており、現在の地名では愛西市・津島市・あま市域を中心とし、その南側は当時は伊勢湾が広がっていたと想定されている。つまり伊勢湾の海とのつながりを考えれば、美濃国安八郡、尾張国海部郡は

一帯としてまとまりある地域として把握できる。ここでは味蜂間の海から海部「シマ」津島にいたる伊勢湾の海辺地域を「海人の世界」として話を進めていきたい。東端は庄内川が流れ込む清須市域とし、因みに名古屋南部の熱田台地やアユチ潟周辺は台地面と小河川が入り込む段丘地形であり、別の括りが必要（土器様式の差を含む）と考えここでは除外する。そして「シマ」という景観が連続する津島から清須にかけては伊勢湾岸の浜堤列上の微高地と想定されており、その観点からここで取り扱う「海人の世界」は、干満の差が激しい湿原と遠浅の味蜂間の海から浜堤列に割拠した人々の風景ともいえる。やや前置きが長くなったが、ここでまずは浜堤列に存在する遺跡群からその動向をまとめておこう。

4. 海部郡浜堤列の遺跡

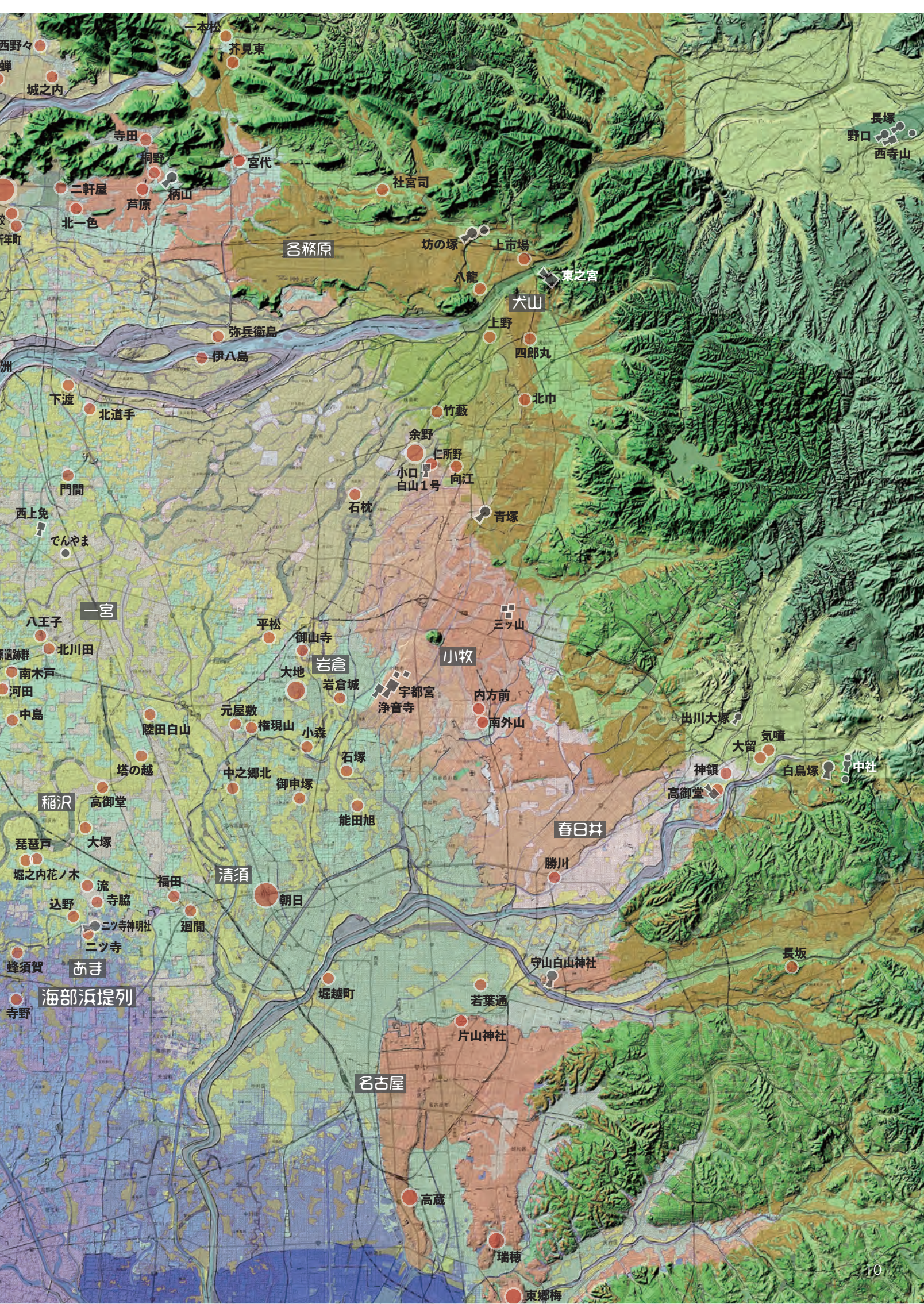
図1から明らかなように、津島地域の諸桑・寺野遺跡から清須市廻間遺跡にかけての弓状の遺跡分布が示しているように、これらは浜堤列上に点在する遺跡群である。その中でまずは拠点集落遺跡でもある津島市寺野遺跡の動向を見

ておきたい（赤塚ほか1999）。この遺跡のはじまりは弥生時代中期前半、ただしその動きは明らかに単発的で継続性は認め難い。問題は次の集落動向に大きなうねりが存在する点である。すなわち本格的な定着時期は廻間式期にあり、おおむね廻間Ⅰ式期を起点に大きく遺跡が展開する。そして面白いのは廻間Ⅲ式から松河戸式の間遺物が希薄となり、その後再び人々がもどってくるのがおおむね宇田Ⅱ式期（5世紀後半）となる。さらに再び空白期を経て8世紀の奈良時代に寺院建築をはじめとする律令期の集落が成立する。最後に12世紀から14世紀にかけて再び人々の営みが見られる。こうした遺跡の動向は何を意味するものであるのかが大変興味深い。遺跡の繁栄と解体・消失を繰り返し、その画期となる時代も重要であろう。この動きが何を意味するものか、もう少し他の事例を見ておきたい。あま市蜂須賀遺跡（旧海部郡美和町）では、まず最古の資料はやはり弥生中期に求められるが破片資料であり単発的な動きといえよう。次におおきなまとまりとしては廻間Ⅰ式に突然ともいえる遺物の集中が

見られる。この時点が寺野遺跡を含めて本格的な集落遺跡としてはじまりと位置付けてよい。次に5世紀後半に新たなまとまりが見られ、空白域を経て8世紀後半から9世紀前半にかけての遺物群がまとまる（湯浅ほか1990）。蜂須賀遺跡を概観すると特に注目したいのは、遺跡動向の波がほぼ寺野遺跡とよく似ている点であろう。続けて「シマ」の遺跡を見ておきたい。愛西市東西野遺跡（旧海部郡佐織町）では遺物の中核は廻間式期であり、やはり廻間Ⅰ式前半期に一つの大きなまとまりが存在する。その後は8・9世紀の須恵器類の出土時点でまとまりが存在する（岩野編1987）。この点は近接して淵高廃寺が存在し、その動向の延長上に位置付けられる。愛西市定納遺跡（旧海部郡八開村）では、こ

こでも同じように廻間式期を中心とする遺物群が見つかっているものの、散見できる範囲においては廻間ⅡからⅢ式期に所属する資料が多い。次のまとまりは5世紀後半ごろの須恵器・埴輪類の一群である。また近接する小判山遺跡では松河戸式・宇田式期の資料が目立ち、5世紀後半から6世紀の須恵器も見られる（服部1996）。これらの遺跡を詳細に比較していくと遺跡単位で微妙に所属時期の中心がブレる可能性も指摘できよう。しかしながら断片的ではあるが、遺跡動向としての大枠は見えてくる。そこでここでは現状での海部郡浜堤列の遺跡を以下のように整理しておきたい。

- 1…海部郡域での人々が徘徊しはじめ「はじまり」は弥生中期前半期、ただし単発的で定住性は低い。その後の弥生後期にはほとんど遺跡が確認できない。
- 2…最も盛行する時期は廻間式期。古墳早期である廻間Ⅰ式前半期に一つの画期が想定できる。これは海部郡浜堤列の遺跡にほぼ共通する。終息は廻間Ⅲ式期にはじまり、松河戸式の4世紀を最後にその後に空白域が存在する。
- 3…5世紀後半にもう一つの画期が見られ、ここでは土師器に加えて須恵器・埴輪等が確認できる。ただその動向はおおむね6世紀前半代までで収束する。
- 4…8・9世紀に古代寺院の造営を含めて地域開発の動きが認められる。古代寺院の多くが海部郡浜堤列



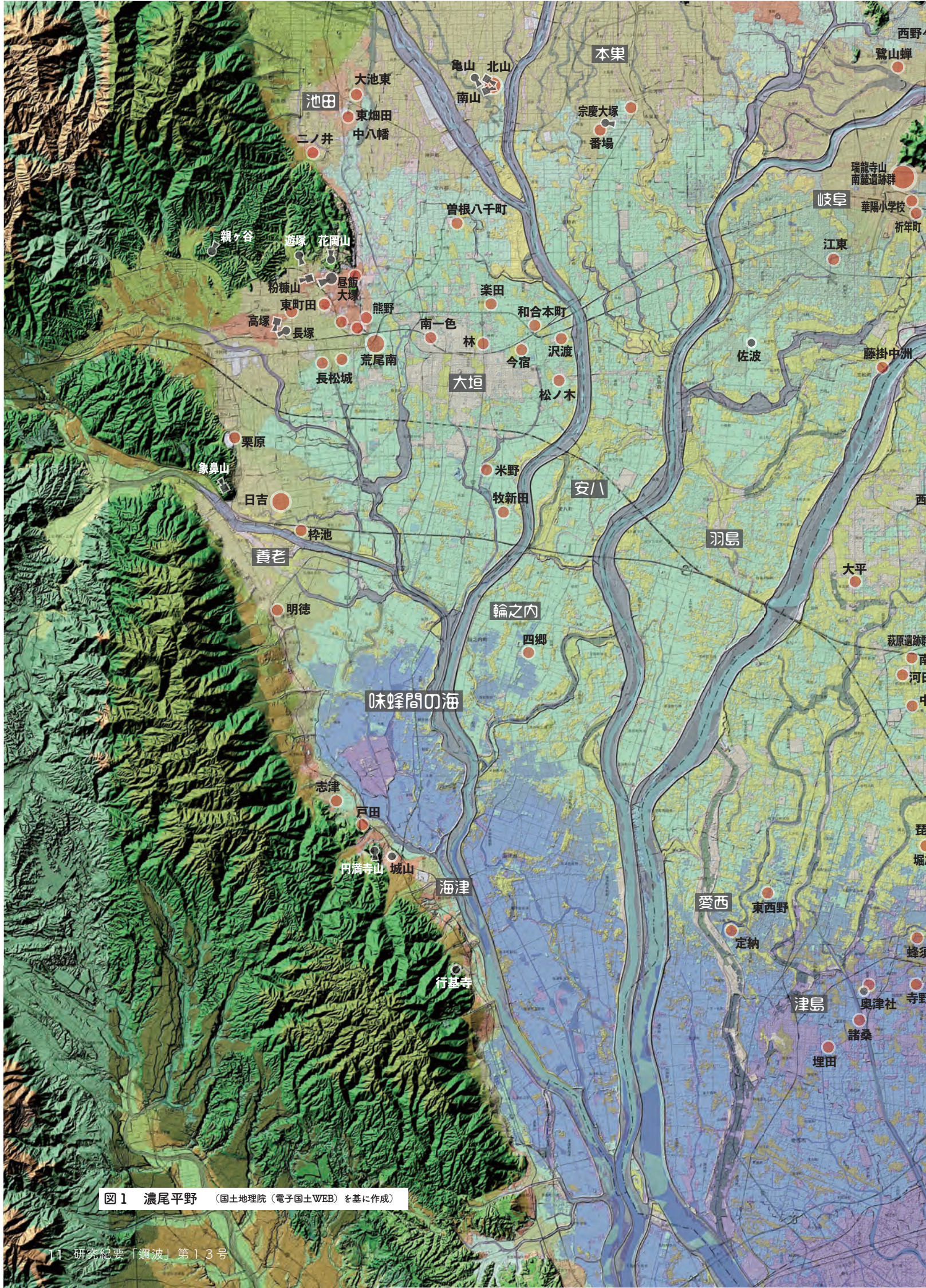


図1 濃尾平野 (国土地理院(電子国土WEB)を基に作成)

上に分布する。それに伴う「街道（東海道）」集落が整えられていく。

以上の特徴を概観すると、大きく見ると特徴2・3・4の三つの時期が存在することがわかる。そして明らかに集落が途切れ人々の痕跡がなかなか見出しにくい時期が存在するようだ。その空白時期をまとめると1・弥生時代後期（山中式期）、2・5世紀前半（宇田Ⅰ式期）、そして3・7世紀代が見えてくる。これは何を意味するのであろうか。

5. 味蜂間の海、北辺の遺跡

次にもう一つの海人の世界である「味蜂間の海」海岸部の遺跡を見ていこう。まず周辺部で最も興味深い遺跡として輪之内町四郷遺跡が存在する。岐阜県史では地下約2メートルから多くの遺物が見つかっているとし、弥生後期から古墳時代にかけて所属する資料が多いと報告されている（大参・安達1972）。遺跡の概要を出土遺物の観察から見ていくと、まず1）廻間式期を起点に集落が構成され、遺物の出土が多い。次に2）5世紀後半から6世紀にかけての遺物群でまとまる。須恵器を含み埴輪片も見られる（神

戸・浅野2025）。因みに高蔵式の甕破片が確認でき、やはり単発的だが弥生中期末には確実に人がやってきていることもわかってきた。すると海部郡浜堤列の遺跡の動向とよく似た動きが読み取れる。ただ細かく見ていくと、例えば海部郡浜堤列では「埴輪」片の多くが尾張型埴輪が主体であったのに比べ、四郷遺跡では異なる製作技法が認められるなど、出土遺物の型式・存続時期など微妙に異なる。この点は後述する。

次に大垣市米野遺跡であるが、調査成果によれば以下のような動向となる（高田2007）。大溝資料が基本ではあるが、廻間Ⅰ式後半からⅡ式前半期を中心として、山中式に遡る資料を最古として廻間Ⅲ式初頭段階で終焉する。その後の遺跡動向については情報がない。次に養老町日吉遺跡は象鼻山古墳群との関係が指摘されている興味深い遺跡である。調査成果によれば、山中式期からはじまり廻間Ⅲ式において終焉する（中島2014）。環濠が掘削された山中Ⅱ式から廻間Ⅰ式期にかけてが集落の中心となるようであり、河道の動きとともに遺構の変遷が興味深い。日吉遺跡の周辺には多くの遺

跡が点在し、古墳時代以降の資料も見つかっており、牧田川流域の遺跡動向として改めて考えていく必要がある。さらに近年調査された養老町明徳遺跡は、山中式からはじまる集落遺跡で廻間Ⅰ式後半期を中心とし、やはり廻間Ⅲ式初頭段階で終焉する（澤村2024）。

6. 味蜂間・海部の海人集落

さてこのように味蜂間の海・海部郡浜堤列をめぐる遺跡の動向を概観してきた。そこから見えてきた風景は以下のようにまとめることができる。その前にこの地にはじめて人の痕跡が見られるようになるのは、弥生時代中期であり僅かではあるが間違いなく徘徊する小集団の姿が見え隠れする。ただいづれも定着には至っていない。

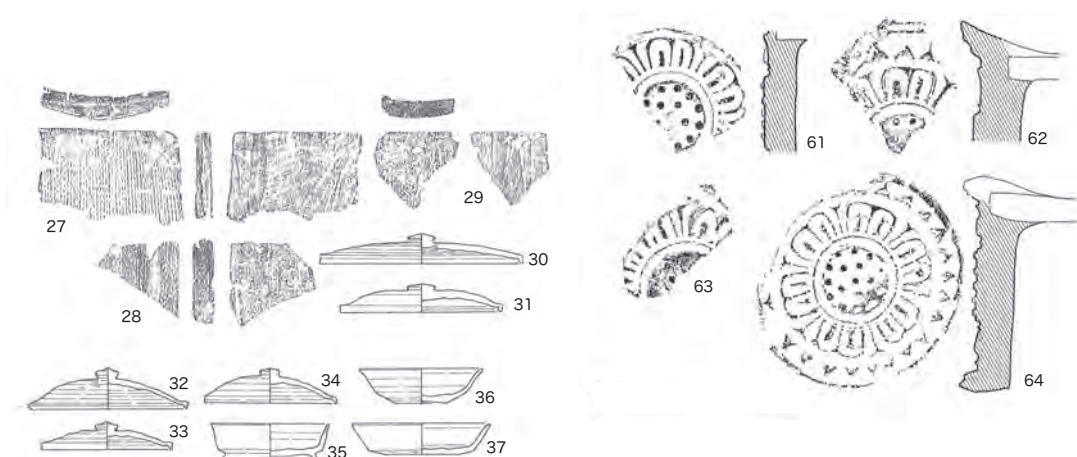
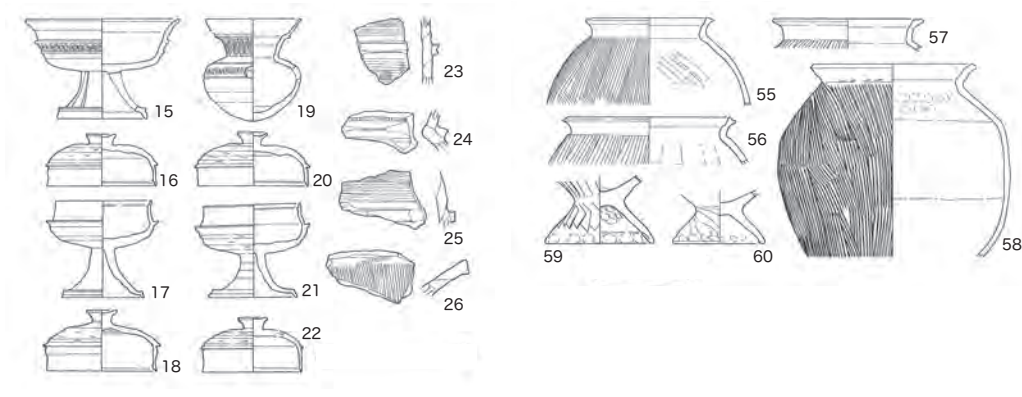
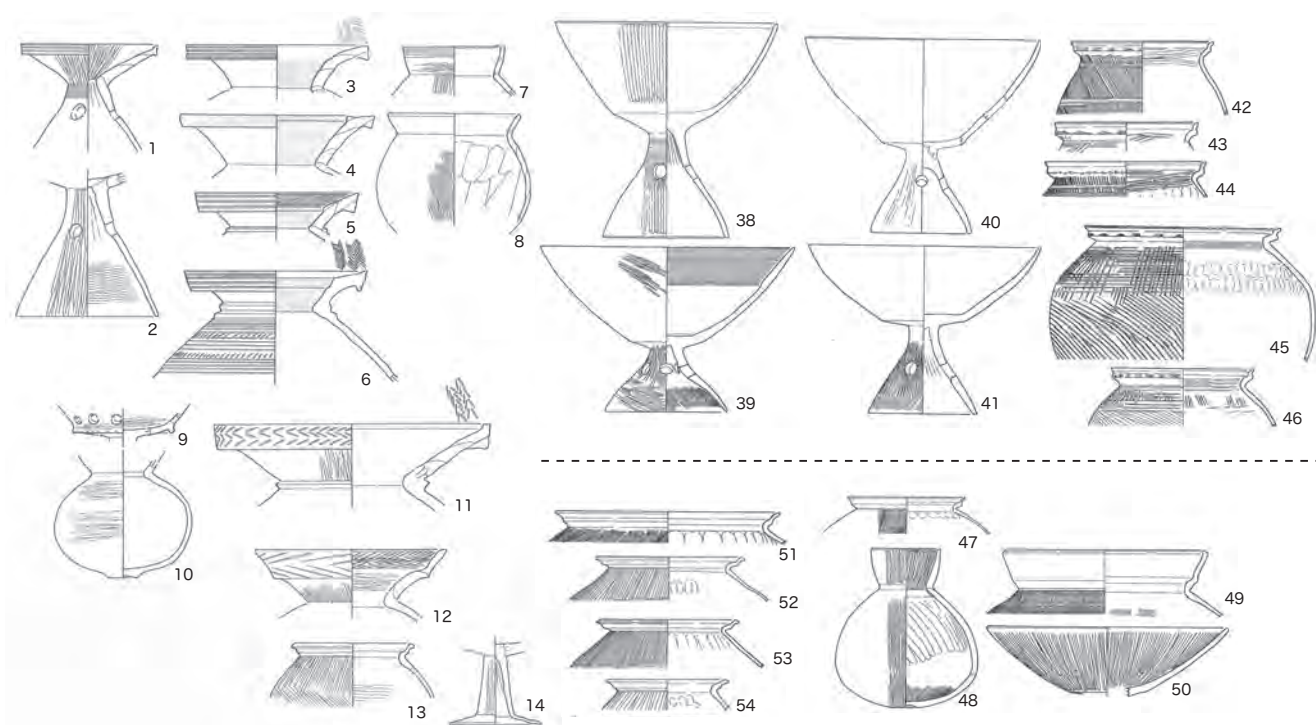
1）人々が集まり何らかの集落を形成し、海と湿原の空域を生業とした生活が本格化したのは、間違いなく廻間Ⅰ式期（2世紀）といえよう。これを「味蜂間・海部の海人集落Ⅰ期」としておこう。もう少し詳しく述べれば山中Ⅱ式の終わり頃から廻間Ⅰ式の初頭に大きな画期を想定でき、浜辺からや

や内陸部にかけて多くの人々が海岸部で動き始めていた事がわかる。

2）次の波は古墳時代中期後半、5世紀後半から6世紀にかけて須恵器の出土が増加する。これを「味蜂間・海部の海人集落Ⅱ期」としておこう。この時期の特徴は小破片ではあるが埴輪が伴う点にある。海岸部での古墳造営の活発化の可能性が想定できる。

3）海部郡浜堤列においては第三波として古代寺院造営を含め8・9世紀の動きが読み取れた。

「味蜂間・海部の海人集落Ⅲ期」しかし「味蜂間の海」周辺ではそのような動きは認められず、ここでは第三波は存在しない。ここでは第三波からその意味するものを読み取ってみたい。まず「海人集落Ⅰ期」はすでに指摘しておいたように弥生時代の拠点集落がことごとく解体しはじめる、大いなる時代の画期に相当する。その象徴的な動きが濃尾平野最大規模の朝日遺跡の終焉という出来事性に表れている。そしてこの主要な要因に長周期変動期というキーワードが指摘され西暦127年イベントを契機に時代が大きく動き始める



蜂須賀遺跡 (1~37) 1/8

寺野遺跡 (38~60) 1/8 (61~64) 1/6

図2 寺野・蜂須賀遺跡出土土器

(赤塚2025)。まさに味蜂間の海・海部郡浜堤列における開発期の嚆矢はここに求めることができよう。そしてその大きな要因が気象変動にあるのは間違いない。次に第2波である味蜂間・海部の「海人集落Ⅱ期」。この動きの背後に見え隠れするのが「尾張氏」台頭の歴史である。名古屋市熱田断夫山古墳の造営に至る新たな集団の活躍舞台として「尾治」なる領域が誕生する時期と呼応する動きとして捉えなおすことができよう(赤塚1996)。因みに海部郡浜堤列の海人集落に点在する埴輪はほぼ尾張型埴輪と想定できるが、味蜂間の海に面した四郷遺跡から出土した埴輪は明らかに異なる。外面大きく粗い板状工具による調整痕が見られる。同様な埴輪を探すと、愛西市川田遺跡や諸桑遺跡(木川・蔭山ほか2002)でも見られ、あるいは尾張型埴輪が流入する先行事例として把握できる可能性もある。いずれにしても徐々にではあるが、第2波の中で尾張と美濃の領域を分ける志向性を生んでいく素地が生まれつつあると推測できるかもしれない。そして第3波が海部郡浜堤列に偏る

点はこの志向性が明確化し、律令的世界の登場の中で街道整備(東海道)を含め、新たな領域整備が始まったことを示している。あるいはこの時点で國・郡域の方向性が明確に整えられていくと評価できるであろう。それは現代まで引き継がれてきた行政的領域区分の萌芽期としても位置付けたい。

7. 島田の「悪神」

ところで海部郡浜堤列上に大変興味深い文化遺産が存在する。代表的な二つの前期古墳の存在である。一つは古式の三角縁神獣鏡が3面出土したとする奥津社古墳(愛西市)。今一つは約80mの前方後円墳である二つ寺神明社古墳(あま市)である。両古墳とも周囲から「味蜂間・海部の海人集落Ⅰ期」の遺物・遺跡の存在が知られている。やはり古墳造営は廻間Ⅰ式期からはじまる海人の世界での部族集団の存在を示すものと考えるのが良いと思われる。現状では廻間Ⅰ・Ⅱ式に遡る墳墓は確認されていないが、遺跡の動向からは当該期に墳丘墓の造営が始まっている点は容易に推察できよう。ではそのままとまりある集団と

はいかなるモノたちであろうか。ここである興味深い「反乱伝承」の存在が気に掛かる。それは島田の「悪神」荒ぶる神の存在である。『新撰姓氏録』によれば、成務天皇の時代に「尾張国島田の上下二県」に「荒ぶる悪神」がいた。そこで神八井耳命の五世孫とされる武恵賀前命の孫、仲臣子上(なかのみこかみ)が、この悪神を討伐した。その功績により、仲臣子上は「島田臣」の姓を賜った。この記述にはまず場所として「尾張国島田」が登場する。島田とは尾張国海部郡島田郷と考えられ、島田を現在のおまし(旧七宝町、から美和町付近)から津島市周辺に比定することが多い。つまりここで言う「シマ」の世界・浜堤列上に位置する遺跡群に相当することはほぼ間違いない。そしてそこにここで問題とした二つの前期古墳が存在し、周辺には「海人集落Ⅰ期」の遺跡が展開する。次に「上下二県」という意味である。海部郡に尾張国邇波「縣主」とともにその存在を推定する意見もある(福岡・平野2016)、いずれにしろ古墳時代前半期に比較的広い範囲の枠組みが存在し、ままとまり

ある地域が形作られつつあった可能性が推定できる。するとそこに現存する二つの古墳を上下二県の範囲と仮定すると、「海部の古道」(湯浅ほか1990)がすっぽりハマる範囲となり、海部郡域の中核的遺跡群がその対象となる。ここに「荒ぶる神」がいたことになる。アザカの荒ぶる神伝承に象徴されるように、反乱伝承に登場する悪神の多くは倭王権から見ての視点であり、地域からの視点は英雄伝承とする場合が多い。この二つの古墳造営を廻間Ⅲ式から松河戸Ⅰ式の間と想定する事が可能であり、その被葬者とその仲間達の伝承を伝えているとも考えられる。海人集落Ⅰ期の大きな動向の最後に古墳造営に至る地域集団の存在が明確に浮かび上がってくる。だがその直後にここで指摘したような空白域が見られ、集落動向が終焉する。では悪神を成敗し島田臣を賜ったとする仲臣子上は、どのような存在と評価すべきであろうか。奈良市にある「嶋田神社」は、この仲臣子上を祀り、悪神征伐の伝承が伝わる(註1)。しかし周辺(古市古墳群)に古墳時代前期末を中心とした

大型墳造営の力強い動きは見出しにくい（伊達宗泰1972）。そこで味蜂間の海周辺の古墳時代前期後半からの大型墳動向を見ていくと、

その最深部となる大垣市域に行き当たる。海部の二つの前期古墳の直後とすれば松河戸Ⅰ式末と想定でき、ほぼ同期の昼飯大塚古墳も射程内になる。すると造営に至る大型墳の出現の一つの出来事性の中に仲臣を登場させても良いかもしれない（註2）。また海人集落Ⅰ期の終焉に造営地の移動を含めた集落変動を想定することが可能であろう。

この段階、「味蜂間・海部の海人集落Ⅰ期」は味蜂間の海から海部郡浜堤列の空域は、ほぼ同様な遺跡動向がみられ一つのまとまりある領域を形作っていたと想定できよう。そして次の段階「海人集落Ⅱ期」になると浜堤列上の地域との分離が見られ、その方向性上に浜堤列上が尾張、味蜂間の海が美濃域といった区分が出来上がっていったものと推定したい。そこに新たな路（東海道整備）が創設されることにより明確に遺跡動向が異なっていく。この方向性を形作ったのは上記したように宇田Ⅰ式以降に動きを加速する「尾張

氏」の台頭と深く関わる出来事であり、その開発史の一コマとあらためて評価しておきたい。

8. 気象変動

最後にこの空域に、集落動向が見えにくくなる空白時期についてまとめておきたい。大きく分けると3つの時期が存在した。1. 弥生時代後期（山中式期）、2. 5世紀前半（宇田Ⅰ式期）、そして3. 7世紀代。

まず弥生時代後期であるが、これは濃尾平野弥生時代中期末に勃発した大洪水が想定できる。尾張部においても高蔵式末期に洪水性の堆積層が確認されており、拠点遺跡の朝日遺跡の集落景観を一変させた。その後の山中式期の集落遺跡動向は、極めて小規模分散的であることがわかってきている。したがって海部の海人集落においても定着に至らず、徘徊する断片的な人の動きにとどまっていたことは想像に難くない。木曽三川が流れ込む低湿地帯においてはさらに厳しい状況であったと思われる。この閉塞感を打ち破ったのが127年の洪水イベントであったと思われる。弥生社会から脱却し、多様な集落形態と新

しい枠組みを模索する力強い動きがおおきなうねりとなり、海人の世界にも大きな動きがおとずれた。次に二つ目の5世紀前半（宇田Ⅰ式期）について。木曽本流域および庄内川水系において広域に洪水性砂堆積が認められる現象が各地で確認されている。「大毛池田層」と呼んだ洪水堆積層の存在である。大毛池田遺跡で確認された出来事は、松河戸Ⅱ式後半期の土器群を埋め尽くす砂層であった。したがってこの砂層は松河戸Ⅱ式2段階に勃発した洪水層と想定した（赤塚2021）。尾張

低地部ではその後、各地での集落動向がほぼ消失し、再び開発の手が及び始めるのが律令期になつてからであった。味蜂間の海人集落Ⅱ期までの空白域はこうした災害から克服する復興への道のりと想定できよう。最後に7世紀代について。6世紀後半段階から7世紀にかけてやはり集落・遺物が認められなくなる。6世紀後半から7世紀は継体・欽明朝から推古天皇の時期で、いわゆる「飛鳥寒冷期」に相当する。6世紀代は気象変動期であることが指摘されてきた（中塚2024）。災害が多発しやはり海拔ゼロメー

トル地帯には、大きな影響があったと類推できよう。やがて寒冷化が治りやや温暖化に向かう時期が古代寺院造営に象徴される8・9世紀の動きとして「海人集落Ⅲ期」が存在する。ただ第三波は海部郡浜堤列では顕著であったが、味蜂間の海沿岸部には見られない動きでもあった。この点は留意したい。

ところで第三波の直前に歴史的事件が起こる。672年の壬申の乱。当地域がその初戦における舞台となる。大海人皇子による事件勃発時における重要な場所として「安八磨郡湯沐」が位置付けられている。湯沐令の多品治に兵を挙げて不破道を塞ぐことにより大海人皇子の戦略が大きく動き始める。では安八磨郡湯沐はどこにあったのか。諸説あるがおおむね安八郡全域を基軸に想定する事が多い（八賀2008）。ところが味蜂間の海、海岸部では、この時期ほとんど遺跡の動向が見出せない。ただ養老町内や大垣市域北部では海人集落Ⅲ期を待たずに遺跡の動きが確認できる。環境変動が治り新たな集落遺跡の動き、復興に向かう時期、歴史を動かす事件の渦中に遭遇した人々は新しい時代をいち早く

予見したに違いない。その渦中の遺跡がどこであるのか、また登場する兵や英雄たちの動きなど一気に凄まじい勢いで新しい方向性が整えられていく。その風景は海部郡浜堤列の「東海道」と、味蜂間の海を迂回することがない新たに整備された、「不破道（東山道）」に象徴される大規模な官衙・集落遺跡の動きとまさに連想する歴史的出来事でもある。

【註】

1) 嶋田神社については奈良県史に記述があるが、想定域をでない（宮坂敏和1989『神社解説』奈良県史5神社）。また古市の石立神社との関係も指摘されている（吉田東伍1969『増補大日本地名辞典』第2巻）。嶋田神社が存在する奈良市古市・八島には古墳時代前期末ごろの古墳が存在する。例えば画文帯神獸鏡などが見つかっている古市方形墳が最も興味深い存在と思われるが、大型墳を含めた継続する造営内容とは言い難い。

2) 672年壬申の乱が勃発し、重要な場所として「安八磨郡湯沐」がある。そこを管理運営していたのが多品治。多氏であるが、そもそもなぜそうなのかは問題でもある。しかしこの出来事以前に、早くから仲臣子上の物語が後の海部郡域や大垣市域に根付いていたとしたら、「多朝臣同祖」という視点が関係付けられる可能性もあろう。

【参考文献】

大参義一・安達厚三1972「第4章 弥生時代」『岐阜県史』通史編 原始
伊達宗泰1972『大和考古学散歩』学生社
岩野見司編1987『佐織町史』資料編2

所三男監修1989『岐阜県の地名』日本歴史地名大系21 平凡社

湯浅健二・江崎武・赤塚次郎1990「蜂須賀遺跡と『海部の古道』」『考古学フォーラム』1 愛知考古学談話会

赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司・城ヶ谷和広・池本正明1991「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム』2 愛知考古学談話会

赤塚次郎1992「海部郡と三河湾の考古学」『伊勢と熊野の海』海と列島文化8 小学館

服部元之1996「第7編考古」『八開村史』資料編2

赤塚次郎1996「断夫山古墳と伊勢の海」『伊勢湾と古代の東海』古代王権と交流4 名著出版

木川正夫・蔭山誠一ほか2002『川田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第103集

高田康成編2007『米野遺跡』大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

八賀 晋2008「安八磨郡湯沐と額田」『愛知県史研究』第12号

中島和哉2014『日古遺跡発掘調査報告書』養老町埋蔵文化財調査報告書第7集

福岡猛志・平野岳美2016「国造制下の尾張・三河」『愛知県史』通史編1 原始・古代

赤塚次郎2021「大毛池田層と5世紀前半期の光景」『邇波』研究紀要第8号 NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

澤村雄一郎2024『明德遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第166集

中塚 武2024「律令制の成立と解体の背景としての気象変動」『天変地異と病』岩波書店

赤塚次郎2025「濃尾平野・2世紀の集落ストーリー」『邇波』研究紀要第12号 NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
神戸孝司・浅野哲男2025「福束輪中における土器の出土（四郷遺跡）」『輪之内学研究』第14号

『尾張名所図会』に描かれた「鳶岩」「箕岩」を訪ねて

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
望月 友恵



図1 『尾張名所図会後編六』
(愛知県図書館デジタルアーカイブより)



図2 大洞池周辺地図
(国土地理院電子国土webに加筆)

歴史好きの方であれば、一度は『尾張名所図会』（以下名所図会）の挿絵を目にしたことがあるのではないだろうか。名所図会は、江戸時代末から明治時代にかけて編纂された、名勝や神社仏閣などを挿絵とともに紹介する尾張地方の地誌である。現代でいえば、絵付きのガイドブックのようなものだ。丹羽郡が収容されている後編は明治13（1880）年に刊行された。

さて、名所図会の挿絵は細部に至るまで丁寧に描写されており、くずし字を解読できない筆者のような者であっても、当時の様子を想像して楽しむことができる書物である。こ

れまでも何度か名所図会に描かれた風景を訪ね歩いてきたが、今回は「鳶岩」「箕岩」として紹介されている奇岩を二ワ里ねつとの服部哲也さんと探し歩いた記録を報告する。「鳶岩」「箕岩」の項は、「善師野驛」の項の後に、以下のように紹介されている。

同村街道の側にあり 共に形ちをもて名づく 行人杖をとどめて奇観とせり

善師野村周辺の木曾街道沿いにある、人々がわざわざ足を止めて眺めるほどの岩であったことが窺える。挿絵を見ると、「箕岩」は道沿いに

そびえ立ち、岩の中ほどには観音像のようなものも描かれている。一方、「鳶岩」は道から外れた後方の山頂に描かれている（図1）。

しかし、この二つの奇岩は、現在では名所としてほとんど知られていない。さて、どこにあるのだろうか。

まず「箕岩」については、善師野宿から木曾街道を北上し、大洞池の手前にある大岩が該当するものと考えられる（図2地点A）。名所図会の挿絵と比較してみると、林立する樹木が松ではなくなっている点を除けば、ほぼ往時の風景がそのまま残されている。今にも荷物を担いだ旅人が坂を登ってきそうな雰囲気だ。

では、「鳶岩」はどうだろうか。絵図では、この「箕岩」の左後方に「鳶岩」が描かれているが、現在は樹木が繁茂しており、街道から岩を確認することはできなかった。そこで、

「鳶岩」があると考えられる地点に直接足を運んでみることにした。無論、明確な道はなく、藪を掻き分けて進むことになったが、ピークまで登ると「鳶岩」であった可能性の高い岩盤の露頭を見つけることができた（図2地点B）。周囲の木々がなければ街道からも見えたであろう。

皆さんも『尾張名所図会』を片手に、往時の風景を訪ね歩いてみてはいかがだろうか。



写真1 地点A「箕岩」か？



写真2 地点B「鳶岩」か？（左上に一部拡大）

赤色立体地図を活用した「邇波」エリアの古墳踏査

―新発見と再検討―

NPO法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
服部 哲也・近藤 健一・横井 誠

1. はじめに

NPO法人ニワ里ねつとでは、これまでのフィールドワークにより、新たな古墳の発見やその可能性ある地点の指摘を重ねてきた。また、先人が古墳やその可能性を指摘しながらも、埋蔵文化財包蔵地として記されなかったがために、忘れ去られようとしている地点についても確認踏査を進めている（文献1～4）。

近年、愛知県内の微地形図（赤色立体地図）が閲覧できることとなった（註1）。やみくもに歩き回ることなく、微地形の「あやしい」地点をピンポイントで検討することが可能となったのであり、早速、赤色立体地図を活用して現地踏査を会員諸氏と進めている。今回はその一端を、①「県遺跡地図」に記載されているが内容不明な古墳、②今回新規

に可能性を指摘する古墳、③可能性が指摘されていないながら「県遺跡地図」には未記載な古墳の、3つに分けて結果を報告したい。

2. 「県遺跡地図」に記載されているが内容不明な古墳

善師野1号墳（犬山市善師野小野洞）包蔵地名「善師野1号墳」は、現在大平山南東麓の谷地形の地点にマークされ、「所在地…善師野字伏屋 現況…山林 遺物…家型石棺 包蔵地概要…円墳」となっている（図1の6地点 註2）。過去、分布図のドット地点を現地踏査したが、その周辺に古墳は確認できなかった（文献2）。今回あらためて赤色立体地図を検討したところ、県分布図のドット地点から西へ180mほどの場所に1辺10mほどの方形状の高まりを確認した（図1のA地点）。地形的には大平山尾根から南

に延びる枝尾根上に立地し、分布図に記された地点が谷地形であるのに比して、古墳築造選地にはふさわしく感じられるので、現地を踏査した。標高145m。座標値は東経136度58分14・752秒北緯35度23分28・97秒である。

訪れた現地は1mほどの高まりであり、西側と北側には人工的な石積みがあった。石積みは人頭大ほどの角のあるチャートが多く、やや直線的に積まれているため方形壇状となっている。ただし、古墳に伴う葺石や根巻き石と判断するには至らない。中央付近には1mほどの大きさのチャートがある。他の石と組まれている様子は確認できず、石室構築材の一部かどうかはわからない。さらに地下に同様の石材の存在も確認できなかった。また、北からの尾根と高まりとの間に、堀割状のものは認められない。また、『地歴学報』（文献7）に記載されている大平山4号墳は、善師野1号墳を指すものと思われるが、「大平山南側の中腹に位置し。

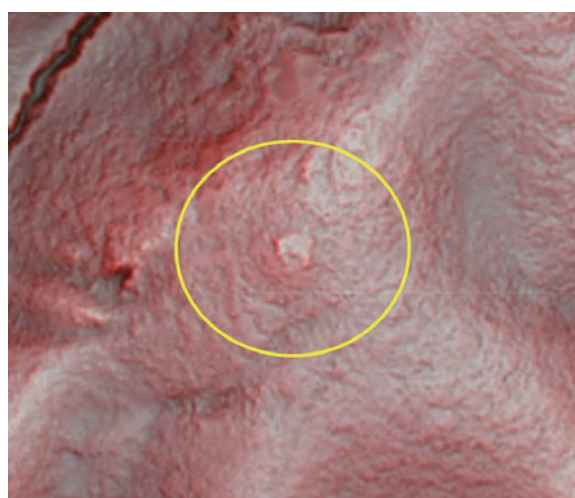


図2 善師野1号墳の可能性ある地点（マップあいちに加筆）

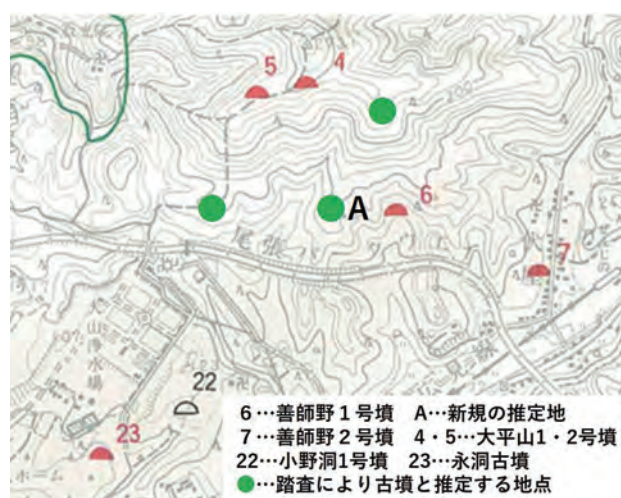


図1 分布図記載古墳と新規推定古墳の位置（県遺跡分布地図に加筆）

石棺の一部と思われる石が露出している」とある。石棺とすれば麓の善師野で産する凝灰質砂岩製と考えられるが、現地に同質の石材は確認できなかった。

結果、今回の踏査では、古墳と認定するまでには至らなかったが、古墳の可能性は残しておき、今後も位置が不明である「善師野1・2号墳」の調査を継続したい。

3. 今回新規に可能性を指摘する古墳

外山地区の古墳（犬山市羽黒外山）

犬山市羽黒字外山地区は、尾張富士から北西に延びる丘陵の端にあたる。地区より東側は、県道188号線と開発された大規模団地となっているため、島状に残された森のような景観となっている。外山地区内には、埋蔵文化財包蔵地として登録されている古墳は無いが、『羽黒村全図』（文献8）には、現在住宅地になっている辺りに3つの古墳の印がある（図3の古墳とした地点）。また、『遺跡分布調査報告―尾張編―』（文献9）には「戸山古墳^{140）}」の遺跡名と「羽黒小学校調査」の記載があり、さらに名古屋博物館には「犬山市羽黒外山出土の金環1点」が「水野

茂コレクション」として寄贈收藏されている（文献10）。これらの地点が今回踏査の地点と一致するかは確認できないが、地区内に古墳があったことは認めてよからう。

外山地区では、以前の踏査により、地区北側の稲荷の祠が建つ地点を石材が抜き取られた古墳の可能性があるとマークしていた（図3のA地点）。今回、赤色立体図で注目したのは稲荷の祠が建つ地点から南西へ約40mの地点で、南斜面が大きく土取りされた崖面に接した地点（図3のB地点）となる。標高は70mほど、座標値は東経136度57分58.459秒北緯35度21分03.562秒である。現地は直径約20m、高さ1mほどの円形盛土があり、盛土中央から南へは大きな挟れがある。その落ち込みは、幅2m強、長さ5mにも及び、横穴式石室の石材を抜き取った痕跡のように見える。石室石材の抜き取り痕と仮定すれば、南に開口（S—10度—E）した横穴式石室を想定できようが、周辺に石材にあたるような石は認められなかった。盛土の周囲は窪地となっており、特に北側は明らかに人工的な掘削であることが分かる。円

形に丘陵をカットして幅3mほどの周溝を巡らせたものと推測する。葺石やそのほか古墳にかかわるような遺物は確認できなかったが、当地点は、横穴式石室石材の抜き取られた古墳である可能性が高いと判断する。

なお、『羽黒村全図』に記された3つの古墳地点は、現在の宅地造成された場所であり造成に伴って消滅した可能性がある。とすれば南斜面に数基が群を成していたこととなる。赤色立体地図の検討でも、古墳の可能性を指摘したB地点北東や北西隣接地には、わずかなマウンドに見える地点もあり、同地区内での埋もれた古墳への注意は継続して必要であろう。

羽黒根比敷の古墳（犬山市羽黒根比敷）

明治村駐車場より北西に向かう谷地形は、根比敷川（半ノ木川へ流れ、五条川へとつながる）のはじまりであり、上流から朝日池・空池・中池・根比敷池とため池が江戸時代から連続して築かれている。赤色立体地図にて円形の盛土を朝日池の南東60mに確認した（図5）。標高100m。座標値は東経136

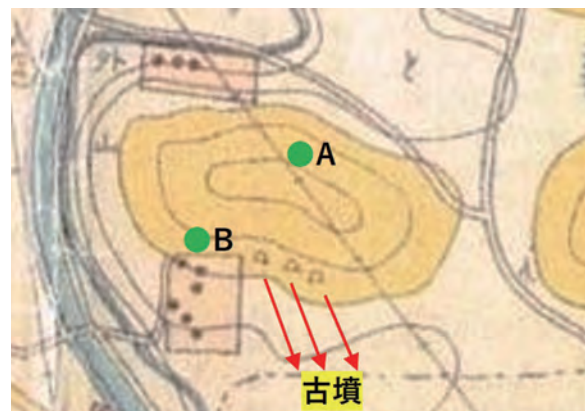


図3 地図に記載の古墳と新規古墳の位置（『羽黒村全図』に加筆）

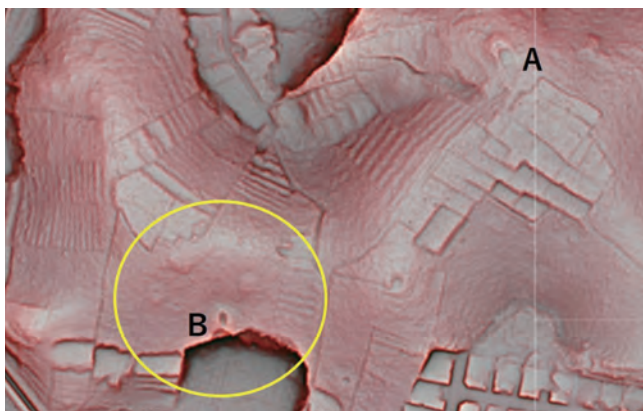


図4 外山地区、古墳の可能性ある位置（マップあいちに加筆）

度59分01.911秒北緯35度21分08.994秒である。地図の上では、池と同様な低地立地に見えたため、古墳の築造にはふさわしくない立地とも思われた。しかし、現地で見つ先に感じたことは、丘陵端部は人工的にカットされているということであった。あらためて周辺の地形を確認すれば、他の枝尾根がため池群の際まで伸びているのに対して、この地点のみ50mほど手前で不自然に平らな低地となっていることに気付く。明らかに丘陵端部をカットして50mほどの平地を造成し、そこに直径20mほどの円形盛土が築かれたと推測することができる。さらに盛土を巡る窪地も認められ、葺石・埴輪は確認できなかったが、周溝を伴う古墳である可能性を大いに高めている。

盛土中央には4m×2m、深さ50cmほどの落ち込みがあり、軸方向は南東から北西（N—45度—W）方向である。ただ、開口方向を想定する落ち込み方ではないため、古墳の主体部があったとすれば、竪穴状の埋葬施設が想定できよう。盛土の裾部（古墳であれば周溝の位置）に60cm×80cm、1.2m×60cmのやや大

型の石があり、石室石材の可能性もあるう。

さて、古墳とすればなぜこの場所に単独的に築かれたのかの疑問が残る。羽黒村の明治17年地籍図によれば、朝日池の北側を「今井道」が通っており、今井に通じる峠道があったことがわかる。そして、その峠を東に抜けた根比敷取葺片平の地点には、7基の古墳（文献1。赤色立体図からも確認できる）の横を通ることになる。つまり峠を挟んで西にはやや大きな一つの古墳が築かれ、東には小さいが多くの古墳が築かれたことになり、点が線に結ばれる（図6）。今井（＝入鹿屯倉の推定地でもある）につながる重要な道すが

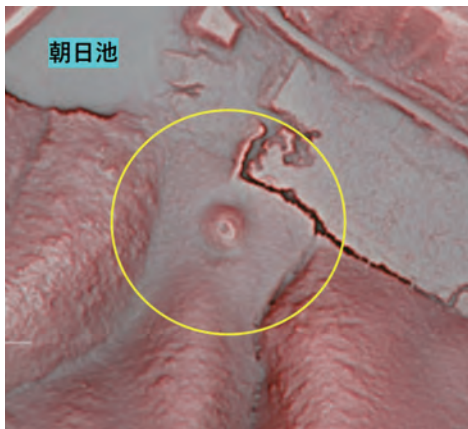


図5 根比敷地区、古墳の可能性ある位置（マップあいちに加筆）



図6 「今井道」と古墳（国土地理院 明治地形図に加筆）

らであったことが、この峠の東西に古墳が築かれた理由の一つと考えられよう。さらには、両地点の古墳とも盛土中央が落ち込む共通性（竪穴系主体部構造の可能性）も見逃せない。根比敷取茸片平地点の7基については、5世紀代の「初期群集墳」の可能性を指摘したが（文献1）、今回発見の古墳も同時期頃の築造と想定しておきたい。当地域では古墳空白の時期でもあり重要度はとても高い。

御所山の北方（犬山市高根洞）

楽田山から南西に延びる尾根の先端上に位置する。赤色立体図では、径15mほどのきれいな円形墳とも思われ、古墳の立地としても最適地であるため、真つ先に現地に向かって確認した。標高105m。座標値は東経136度57分47.899秒北緯35度20分04.922秒である。

間違いなく人工的な盛土ではあるが、中央には「小島大明神」の碑が立ち、新しい石組に囲まれており、残念ながら古墳との判断には至らない。ただ、同様な立地である約300m南東の枝尾根上には、多くの須恵器を出土した古墳があったことは確実（文献14）であり、古墳築

造の好適地であることを含めて、古墳を改造して大明神を祀った可能性もあるとしておく。

なお、周辺は見事に開墾された段々畑であり、大明神の碑は開墾に尽力された「小島」さんを崇拝したものと推測できる。地区の歴史を考える上ではこれとても貴重な文化遺産と考える。

野口古墳北地点の古墳（小牧市野口）

犬山・小牧の市境を走る県道453号線（明治村小牧線）の鳥坂

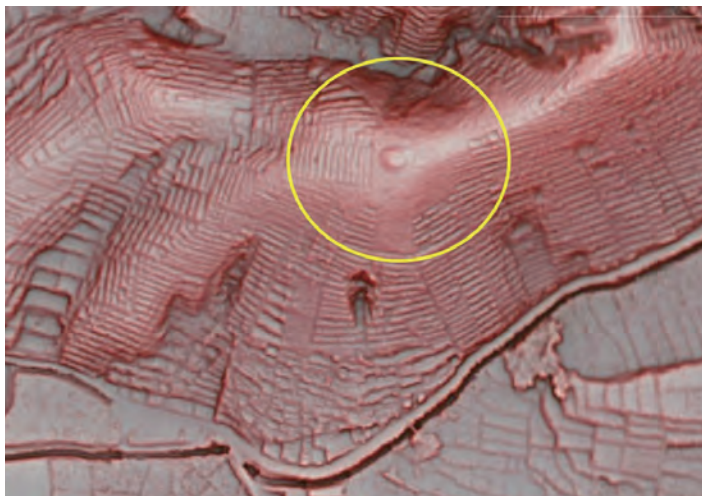


図7 御所山の北方のマウンド（マップあいちに加筆）

峠付近には「鳥坂古墳」（犬山市）と、「野口古墳」（小牧市）が道を挟んで対峙しており、この峠道が古墳時代以来でさかのぼることは確かである。そのうちの野口古墳は、現在尾張白山（260m）から西に延びる枝尾根のやや谷側にマークされている（註3、文献11）。内容は「所在地：野口、現況：山林、概況：横穴式石室、備考：石室の一部が露出」と記されている。過去の踏査では、その地点に古墳を確認できなかったが、

ひとつ北の尾根を越えたところで15mほどの円形の盛土を見つけ、これが「野口古墳」と合点していた。遺跡地図の地点間違いとの判断であった。ところが、その後関係者からの話を聞くにつけ、野口古墳所見の「石室の一部が露出」などもなく、どうやら違う古墳である可能性が高まった。ここでは、たどり着いた盛土地点を古墳の可能性ありとして紹介しておく。150m南南西に鳥坂古墳、200mほど南南東に分布図

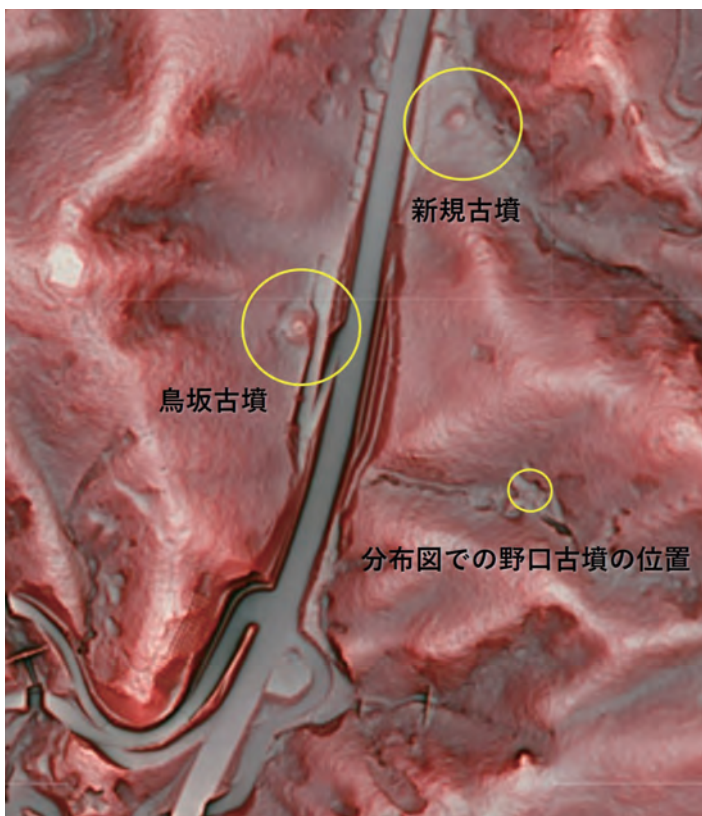


図8 鳥坂峠周辺の古墳（マップあいちに加筆）

中の野口古墳が位置することとなる
(図11)。標高126m。座標値は
東経136度59分16.764秒北
緯35度19分37.781秒である。

現状の立地は、尾張白山から西へ
伸びる枝尾根先の平坦地であるが、
先述の根比敷の新規古墳とともに良
く似た様相である。すなわち、丘陵
端部をカットして平地を造成し、そ
こに直径15mほどの円形盛土が行わ
れたと推測する。均整な円形で崩れ
はなく、葺石の一部であろうか、人
頭大ほどの石が落ち葉の合間からわ
ずかにのぞく。横穴系施設の特徴で
ある落ち込みや盗掘による陥没はな
い。鳥坂古墳は横穴式石室であり、
野口古墳も横穴式石室と想定できる
が、この2古墳には先行する竪穴系
埋葬施設をもつ古墳と想定しておき
たい。

若宮八幡社の古墳(小牧市林)

入鹿池から鳥坂峠を越えて旧道に
入り林方面に進めば鳥坂池に至る。
その池の北側に赤色立体図で15mほ
どのマウンドを確認する。地形的に
は尾張白山から派生する枝尾根の南
端に位置する。標高70m。座標値は
東経136度59分04.301秒北
緯35度19分14.489秒である。

円丘は周囲の崖面と連続するた
め、高さは不明であるが、3mほど
は人工的な盛土と推定する。盛土頂
には小さな祠があり、500m南に
座す三明神社の摂社若宮八幡を祀る
という。盛土の周りに周溝状の落ち
込みは認められない。祠の左右後ろ
は人頭大の礫を直線状に並べ基壇風
にするが、前面は、長さ1.2m幅
90cmの上部が平たい大柄な石と、そ
の前には長さ50cm幅60cmの石がぴ
たりと接している。組まれた時期は
不明であるが、横穴式石室の天井石
をそのまま利用したと考えられなく
もない。横穴式石室の天井石とすれ
ば南に開口することとなる。また
祠基壇の前にも石室に利用できそう
な1メートルほどの石などが立って
いる。

驚いたのは小さな祠にひっそりと
須恵器の甕(はそう)が供えられて
いたことである(写真1)。甕は丸
底で座りが悪いためか伏せて置かれ
ていた。高さ9cm口径8cm胴部回り
6cmと小型で、注ぎ口部は突出せ
ず、穴の経は6mmと小さい。胴部下
半は丁寧なヘラケズリがみられ、底
には直線2本による「V」字状のヘ
ラ記号がある。胴部には沈線に挟ま

れた列線文があり、その刺
突は細い工具で丁寧に刻ん
でいる。口頸部外面に刺突
はなく、二重口縁部の段の
稜線は緩やかで新しい様相
を示す。なお口縁部の半分
ほどは折損していた。年代
観は6世紀後半から7世紀
初め頃と推定する。

さて、甕は出土のまま洗
浄されていないため、埋没
した土が付着・充填してい
た。黄白色の細やかな、さ
らさらな土であった。同様
な土は祠の下にもみられた
が、祠のあるマウンドの前
面が、平坦に造成されてお
り、その造成地にも同様な
土が薄く覆っていた。甕が
この地で、祠の建立や造成
中に出土した可能性を強く
感じさせる。また、口縁部
の欠損は比較的新しい割れ
口であり、出土時の欠損と
も思われた。周辺に落ちて
いないかとしばらく探した
が、残念ながら見つかるこ
とはできなかった。

須恵器甕については、そ



写真1 祠前に置かれていた須恵器の甕

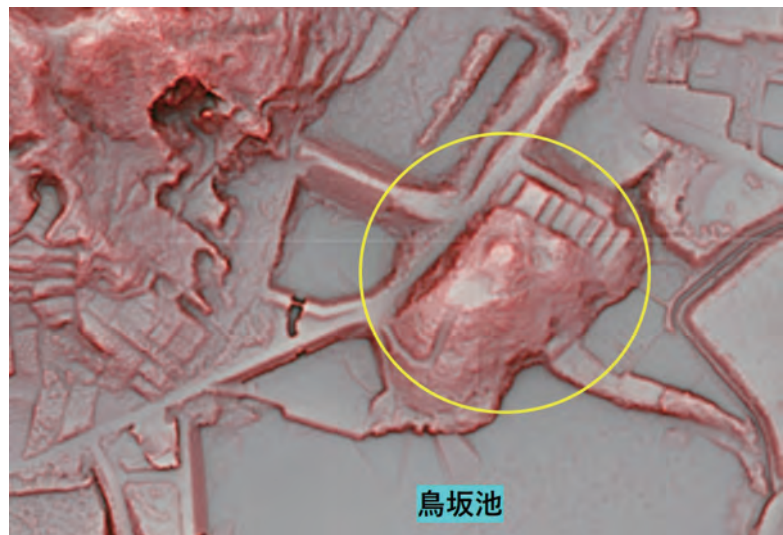


図9 若宮八幡地点の古墳の可能性ある位置(マップあいちに加筆)

の後小牧市教育委員会に連絡し、文
化財の扱いにしていたくべく、手
続をお願いした。引き続き、掘り出
した方を探し出し聞き取りを行うな
どの調査は継続したい。

野口神明社の古墳（小牧市野口）

前述の若宮八幡社地点の南東
500mに位置する。地形的には尾
張白山から南北に伸びる枝尾根の最
南端であるが、前述の若宮八幡地点
とは別の枝尾根である。現在は開墾
や道により丘陵からは寸断され、
孤立した「神社の森」感がある。
標高65m。座標は東経136度59
分18・109秒北緯35度19分02・
309秒である。

赤色立体地図で認められた痕跡
は、神社北東の丘陵東斜面にあり、
10mほどの盛土と周りには溝状の落
ち込みも確認できる。現地では高さ
は1・5mほどであること、中央は
大きく抉れていることも観察でき、
その落ち込みは南東が開放してい
る。周辺に石材は認められないが、
南東方向に開口（主軸はS—40度
—E）する、横穴式石室の石材を搬
出した後の様子と考えて齟齬はな
い。周溝状の落ち込みは、丘陵斜面
をカットして作られたことがよく観

察できる。なお、葺石は認められな
い。

さて、神社境内は遺跡とはなつて
いないが、飯尾恭之氏が須恵器など
の遺物を採集しており、名古屋市博
物館に「野口神明社出土資料19点」
として寄贈収蔵されている（文献
10）。内容は土師器・須恵器・灰釉
陶器・無釉陶器であるが、土師器や
須恵器が古墳時代にまでさかのぼる
ものかは今回確認しておらず、今後
調査したい。また、若宮八幡社と野
口神明社との間には、遺物散布地の
鳥坂遺跡・勾当田遺跡がある（図
11）。小牧市のデジタル地図情報の
遺跡概要には鳥坂遺跡で須恵器甕と
甕の出土が、勾当田遺跡でも須恵器
甕の出土が記載されている。こちら
も今回は実見しておらず、古墳時代
にまでさかのぼるものかは確認して
いないが、古墳に挟まれた地区に集
落跡の存在する可能性もあり注目さ
れる。

北新地古墳北西の古墳（小牧市野口）

赤色立体地図ではわからなかった
が、踏査中に古墳石室の可能性ある
石組を発見したため紹介する。小牧
市東北部に位置する「ふれあいの
森」は、尾張白山とその南麓に位置

し、森林浴やハイキングなどが楽し
める遊歩道や展望台が整備されてい
る。紹介する古墳の可能性ある地点
は、西尾根を回る散策コース中の展
望台から100m北に位置する。こ
の地点は尾根上の緩斜面であるが、
すぐ北からは急勾配となり、それを
登りきると東西の尾根コースに合
流する。地点は遊歩道の東側にあ
り、標高は205m。座標値は東経
136度59分33・213秒
北緯35度19分27・590
秒である。

石材は1・1m×60cmの
石が最も大きく、その南側
にも80cm大ほどの石が3・
4石集中している。北西側
に石と石の隙間があり、そ
こから内部を南へ覗くこと
ができる（写真2）。左は
天井石が側壁によつて支え
られているようにも見える
が、右壁は不明である（写
真3）。天井石と側壁とす
れば、60cmほどの石室幅と
なり、南東に開口する小型
な横穴式石室が想定できよ
う。マウンドはなく、周溝
状の落ち込みは周囲に確認

できなかった。

結果、横穴式石室と断言するには
至らないが、「ふれあいの森」内には
神尾前古墳や大山3・4号墳など
小型の横穴式石室墳が偶然見つかつ
ており、本地点も古墳である可能性
は高いと考える。

さて、可能性ある今回の地点をも
古墳と認めた前提で、尾張白山南斜
面の古墳を概観すれば、山頂から伸



図10 野口神明社北の古墳の可能性ある位置（マップあいちに加筆）

びる各枝尾根に広い範囲ながら、単発的に築かれていることが分かる（図11）。狭い範囲に集中して築かれる、いわゆる「群集墳」とは異なる展開であり、眼下には内津峠へ抜ける道が想定できることを含めて、その在り方は興味深い。そしてその後は、古墳の終焉と重なるようにして、大山廃寺が創建され、また南を広く望むエリアには尾北古窯跡群が大きく展開することとなる。この地区広域に古墳が築かれたこともその後の歴史と無縁ではなからう。

4. 可能性が指摘されながら「県遺跡地図」には未記載な古墳 安楽寺古墳（犬山市池野裏山）

『地歴学報』（文献7）には「石室上部が露出している」と記載がある。犬山市発行の発掘調査報告書（文献12）挿入の分布図にも、本地点付近にドットが落ち「安楽寺古墳」としているが、現在埋蔵文化財包蔵地とはなっていない。犬山市史（文献13）では「碎石現場の境付近にもあるといわれているが確認できなかった」とされており、同古墳はすでに破壊されたも



写真3 石室？内部の様子



写真2 石材の様子

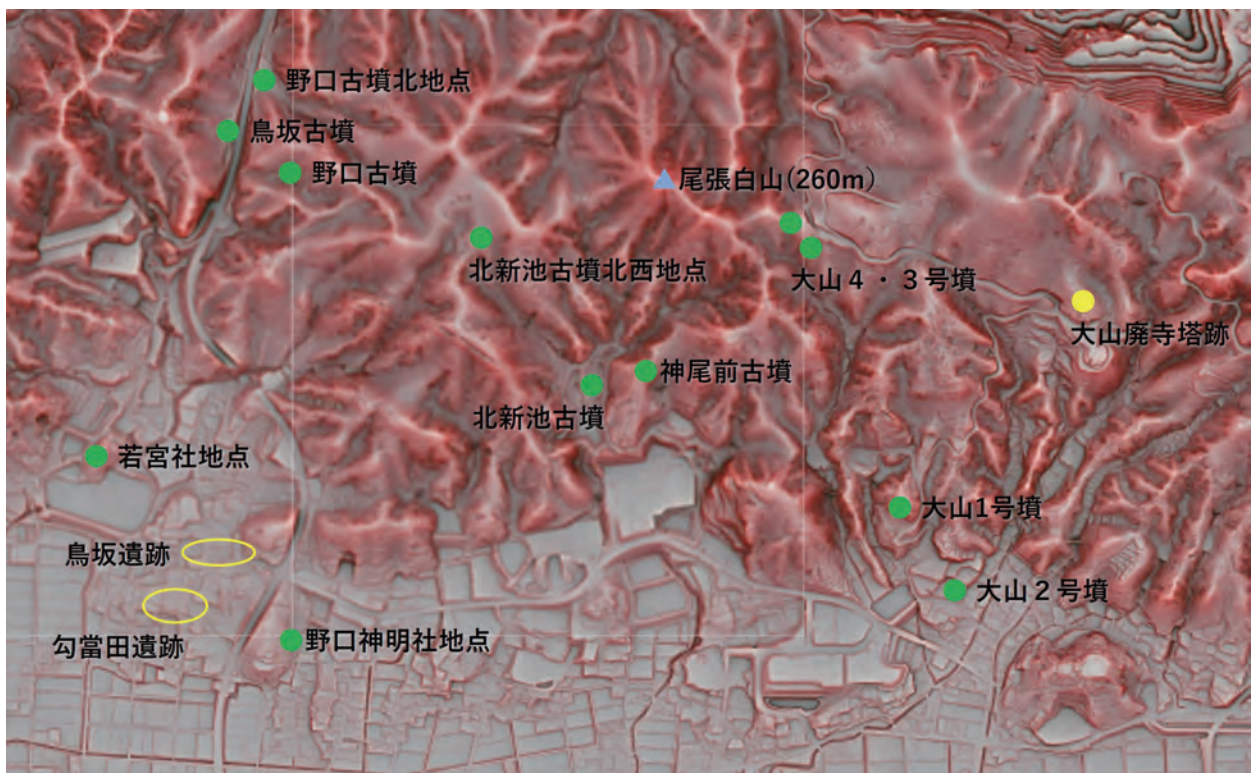


図11 尾張白山西南麓の古墳群と可能性ある位置（マップあいちに加筆）

のと思っていた。しかし今回『地歴学報』の記事「高さ120mの所に立つ鉄塔から北東へ20mほど行った所にある」を頼りに、赤色立体地図を確認したところ、鉄塔跡らしき平地（現在鉄塔はない）の北東20mにわずかな盛土を確認し、学報の記事に一致することから現地に赴いた。標高125m。座標値は東経136度58分47・587秒北緯35度20分27・017秒である。

現地は尾張富士から南へ延びる急な枝尾根斜面が終わり、なだらかな緩斜面になった地点で、1mほどの高まりを確認する。盛土は東西10m・南北5mと細長い楕円風であるが、周りに溝状の落ち込みは認められない。盛土の中心には1・4m×70cmと、65cmの石2個があり、その周辺には20〜30cmの石が20個ほど散在していた。一部の石は組んであるように見えるもののはっきりとはしない。これらの石は、周辺にある花崗岩が多くを占めるが、中心の大柄な2石は花崗岩ではなく運ばれた石と思われる。石室を構築した石材と考えても違和感はない。なお、『地歴学報』では東西方向の石室とされるが、軸方向は不明である。

結果的には地歴学報記載当時と変わらぬ様子が現在も確認でき、古墳としての可能性は十分にあると思う。

六郎洞古墳（犬山市善師野六郎洞）

『地歴学報』（文献7）に「六郎洞古墳」として記載があるが、現在埋蔵文化財包蔵地とはなっていない。赤色立体地図では径20mほどのきれいな円形盛土が確認できる。標高114m。座標値は東経136度58分30・119秒北緯35度22分59・195秒である。

現地踏査の結果、半世紀以上前の『地歴学報』の記事が、現在も有効であることがわかった。敬意を表しそのまま転載する。「善師野の南側の丘陵地帯の一角に立地し、六郎洞第二池東側の峰の先端に存在する。善師野集落が見おろすことができる。昔、神社であったという所であるため、神社であった時の石組が残っている。墳丘があり、直径20m、高さ6mほどの円墳と思われる。墳丘はだいたい削られていて上部に神様が祭られているその西側には比較的大きな石が2個あり、おそらく石室に利用された石と思われる。古墳という確たる証拠はない」（註4）。補

足すれば、「大きな石2個」は1mほどのチャート。マウンドの南西部に凹みがあり、横穴式石室とすれば、この方向の開口と推定できる。また、マウンド周りに、溝のような落ち込みは見当たらない。

墳丘上には善師野石製の小さな祠があるが、この他にも善師野石およびその断片が、マウンド周辺に散在していた。善師野石は古墳時代後期の家形石棺にも採用される地元石材（凝灰質砂岩）であるが、近世以降も灯籠やかまど、さらには石垣

など地元で多用されており、古墳時代の石棺の一部との判断はできない。

結局『地歴学報』同様に「古墳という確たる証拠はない」と結ばざるを得ないが、埋蔵文化財包蔵地として記載し、注視すべきかと思う。

ヒヨトリ塚（小牧市岩崎）

『東春日井郡誌』（文献15）の「岩崎山の古墳」の項には「岩崎山嶺にありしを「ヒヨトリ塚」と云ひ、其の他数カ所に存在せしが、今は僅に一ヶ所石廊の露出したものがあ

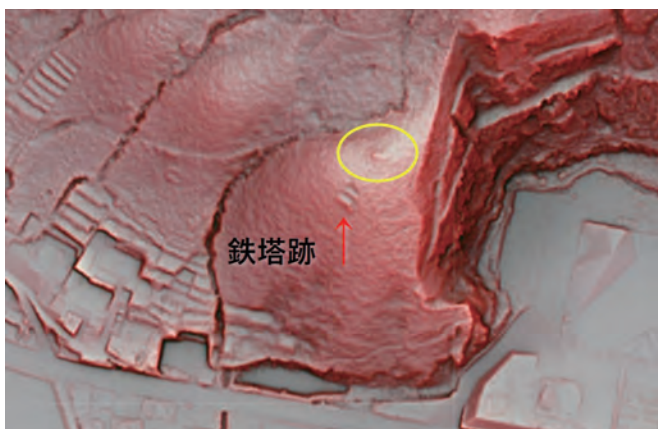


図12 安楽寺古墳と鉄塔跡（マップあいちに加筆）

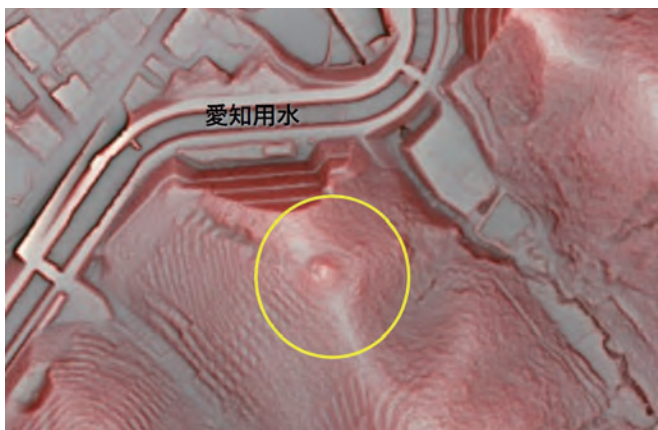


図13 六郎洞古墳（マップあいちに加筆）

るのみにして、他は悉く取除かれたり」とある。「一ヶ所石廓の露出」は岩屋古墳を指し、現在は50mほど北へ移築保存されている。「ヒヨトリ塚」については「岩崎山嶺」とあるので、高い位置での立地と思われるが、現在、山頂近くに残るマウンドを「ヒヨトリ塚」と推定する。実際、現地には「ヒヨド古墳 伝承地」との手作り看板が「岩崎山自然と石の会」の名で立てられている(註5)。以前、地元の方に「出土品とかはわからないが、昔からこの場所は古墳だと伝わってる」ともお聞きした。現在、埋蔵文化財包蔵地とはなっていないが、昨今岩崎山が大きく改変されていることを想うと、速やかに包蔵地への記載が望まれる。標高52m。座標値は東経136度56分00・976秒 北緯35度18分47・905秒である。

現地は径約20m高さ1mほどの円形盛土がある。赤色立体地図でも明瞭に確認することができるが、方形状に見えなくもない。盛土には中央から南西方向に大きな袂がある。その袂は南西端が開放されているので、元は南西に開口(S—30度—W)した横穴式石室があった

と想定できよう。袂は、幅5m長さ10mを超える大規模なものであるが、ちょうど麓の岩屋古墳の石室を据え付けた掘り込みと同等規模であり、大柄な石材を使った岩屋古墳と同規模の横穴式石室があったと想定してもあながち間違いではないと思う。頂の古墳と麓の古墳、同規模な二つの古墳が存在した可能性を考えると、古墳時代の岩崎山のまた違った景色が見えてくるのではなからうか。

さて、岩崎山は花崗岩の山であり、近世名古屋城の石材産地として盛んに切り出されて運ばれている。唯一残った岩屋古墳石室の天井石にも矢穴の残る石があり、一旦は切り出そうとしたことが確認されている(なぜ途中でやめたのかは不明)。「ヒヨトリ塚(ヒヨド古墳)」を含めて「悉く取除かれた」時代は名古屋城に石材が運ばれた時代に相当する可能性もあろう(註6)。

5. おわりに

NPO法人ニワ里ねっとでは、これまでのフィールドワークにより、新たな古墳の発見やその可能性ある地点の指摘を重ねてきた。ただし、

組織の信頼性が低くみられているのだろうか、残念ながら埋蔵文化財包蔵地として追加記載を行っていただけた例は全くない。引き続き試掘など、もう一步踏み込んだ調査を行うことができれば・・とも思うが、正直とても歯がゆい思いがある。今回も「古墳の可能性」を指摘するのみにとどまるのであるう。

ただ、今回は「赤色立体地図」という、新たな散策アイテムを手に入れたことで、遺跡を歩く面白さを再認識させてくれた。やはり現地に立ち、そこに生きた人々を想像することはとても楽しい!地域に残る歴史を掘り起こし、今に活用して未来に伝える。そんなNPOの活動に誇りをもつて、めげずに重ねていきたいと思う。

本稿は現地踏査した各人の観察結果を突き合わせて検討し、服部がとりまとめて記述した。

また、兼松泰弘氏・望月友恵氏・中嶋隆氏には現地踏査

等にてご協力を得ました。記して御礼申し上げます。

【註】

1 『マップあいち』(愛知県統合型地理情報システム)内の「森林情報マップ」<https://maps.pref.aichi.jp/map/view/map.jsp?mid=21378>
また、前号の研究紀要「瀬波」においても、兼松泰弘氏が赤色立体地図を活用して新規の窯跡を多く発見したことを報告した(文献5)。

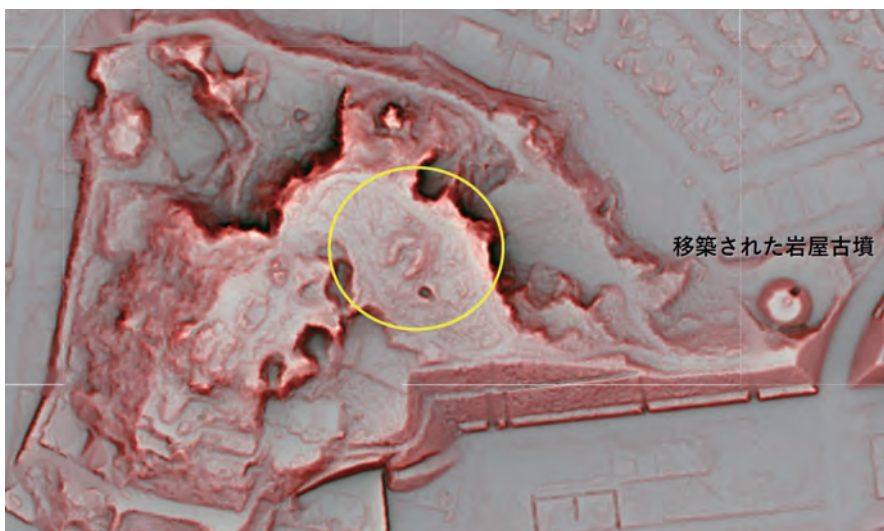


図14 岩崎山周辺(マップあいちに加筆)



写真4 鵜鳥塚古墳の看板

2 現在は、愛知県が公開するホームページ『マップあいち』の「愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）」で閲覧が可能であるが、大縮尺で細かな地点が確認できないため、地点確認においては現在でも紙ベースの『愛知県遺跡地図』（文献6）が有効である。

3 小牧市の遺跡分布図はデジタル化されており、細かに遺跡位置とその概要を確認することができる。小牧市の地図情報（公開型GIS）
https://webgis.alandis.jp/komaki23/webgis/index.php/autologin_jswebgis?ap=jsWebGIS&m=2&u=guest12

4 なお、位置表記の「六郎洞第二池東側」は「六郎洞第二池西側」の間違えである。

5 2004年当時建てられていた看板には「鵜鳥塚古墳」と書かれ、「1号塚」「2号塚」とあったが、2号塚はわからなかった（写真4）。

6 文献16「岩崎山石塚」の項には、「岩崎山頂、ヒヨドリ塚を始め所々に古墳が点在したのは明治初年頃で以後次々に盗掘され、こわされ」と丹羽欽治著「続々田原宮見聞録」からの文を引用掲載している。地元の方からも「石材は尾張富士への献石などにするために全て抜き取られた」とも聞いた。

【文献】

1 服部哲也・近藤健一「入鹿池周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「遡波」創刊号』2014年

2 服部哲也「大平山周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「遡波」3号』2016年

3 服部哲也・近藤健一「蓮池・西山古墳群周辺の新規発見古墳について」『研究紀要「遡波」4号』2017年

4 服部哲也・近藤健一「高橋古墳群と天道塚古墳」『研究紀要「遡波」5号』2018年

5 兼松泰弘「赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見」『研究紀要「遡波」12号』2025年

6 愛知県教育委員会『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』1994年

7 愛知県立犬山高校地歴クラブ『地歴学報第9号』1971年

8 『丹羽郡羽黒村全圖』1951年

9 愛知県教育委員会『遺跡分布調査報告―尾張編―』1959年

10 名古屋博物館『名古屋博物館蔵品目録第1分冊 総集・考古編』1996年

11 小牧市教育委員会「小牧市遺跡分布地図（Ⅱ）」1991年

12 犬山市教育委員会『十三塚第3号墳 熊野神社第1号墳』1972年

13 犬山市『犬山市史』史料編3 考古 古代・中世 1983年

14 大塚友恵「犬山市字北洞出土の須恵器について」『研究紀要「遡波」5号』2018年

15 東春日井郡役所『東春日井郡誌』1923年（1972年復刻）

16 小牧市教育委員会『小牧の文化財 第1集』1970年

木曽街道「楽田追分道標」の今と昔

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

近藤 健一

はじめに（楽田追分の歩み）

広辞苑（第七版）で「追分^{おいわけ}」を引いてみると、

①道の左右に分かれる所。分岐点。各地に地名として残る。

②追分節の略。

とある。犬山市楽田の追分地区はこの①の例に漏れず、木曽街道と稲置街道の分岐点「楽田追分」から字名・集落名が生まれている（写真1）。木曽街道は元和元年（1615）、尾張藩が徳川幕府から木曾山を拝領し、同地へ通じる道が必要となったため開かれたいわゆる藩道である。開通の時期は元和9年（1623）頃と推定されている（註1）。また稲置街道は犬山と名古屋を結ぶため、寛永年間（1624～44）に犬山城主・成瀬正虎が開かせ、木曾

街道に接続した道である（註2）。これらの事実から、楽田追分の歴史は江戸時代の初め、寛永年間に始まったといえる。

江戸時代の追分の様子を伝える資料は多くないが、拾い出してみると、享保11年（1726）作図・明治16年写の「旧犬山附御山細見絵図」において追分三差路の周辺に家並みが描かれ（図1）、文政5年（1822）完成の『尾張御行記』楽田村の条では同村の出屋敷として追分の名を挙げ「両街道ノ岐ナリ」と記す（註4）。また現在、三差路の少し北に残されている石仏群には享保以降の年号が刻まれ、その中には「安永九子六月吉日 追分講中」と刻まれた庚申像（1780年）や「諸神諸佛諸菩薩 文化三丙寅二月追分村」とある石碑（1806年）などが含まれる（写真2）。これらの資料から、遅くとも江戸時代の中

頃には三差路周辺に追分という名の集落が形成されていたと思われる。このほか、旅人が楽田追分のことを道中記に書いている（註5）。

○尾張藩士で俳人の横井也有（1702～83）、成瀬氏の祝賀のため葉月に名古屋から犬山へ行く。『楽田村を過て追分の茶店に休む。』はや日も西山にかたむきて、木の間もる日田家の屋根をかすり、夕顔に風もちて波打がごとし。

夕兒の這ひかゝりたる藁屋哉こゝを立出行ばはや羽黒村なり…」

○尾張藩士の細野要齋、弘化2年（1845）4月に名古屋から徒歩で継鹿尾山と岩屋観音に詣でる。

「…小牧村の出はなれに、岩崎村の出店あり、藤花を架して可観…追分にて握飯を喫し、犬山城下に至り、城郭を一望し、継鹿尾山に至る…帰道は内田の渡しを越へて、犬山に出、追分にて握飯を喫す。先きに過れる藤花の茶店に至て…」

これらのわずかな記述から、追分が旅人の休憩所になっていたことがうかがえる。

明治に入ると木曽街道は藩道ではなくなったが、名古屋・犬山間の最短経路として引き続き重視された。



写真1 楽田追分を南側より（2026年4月）
左が稲置街道、右が木曽街道



写真2 石仏に刻まれた追分の地名



図1 楽田追分の周辺図
上…旧犬山附御山細見絵図（享保11年、註3）
中…明治24年地形図（今昔マップon the webより）
下…現在（国土地理院電子国土Webより）



写真3 楽田追分道標（2026年4月）
手前から①②③④

この頃の楽田追分の様子を『楽田村史』『追分誌』『犬山市史』を参考に述べてみると、明治初期以降は旅籠屋、煮売屋、薬屋、履物屋、髪結床などが軒を並べて繁昌し、人力車の丁場（車夫の待機所）もあった。三差路の東側には弘法堂がまつられていた。明治20年に追分巡査駐在所を設置。明治後期には定時馬車（時間馬車）が名古屋・犬山間を1日5往復し、追分に乗場があった。その後時代の変遷とともに定時馬車は正9年頃、人力車は同13年頃姿を消した。昭和6年には三差路の東に名鉄大曽根線（現・小牧線）が開通、同12年には三差路の西150mの所に

道路付け替えによる新しい犬山街道（のち国道41号、現在は県道）が開通し、これをもって追分三差路を含む旧街道筋は主要道としての役割を終えた。

現在、三差路付近は住宅地となっており商店などは残っていない。昔をしのぶ物は、まず1つは左右に分かれる道路の形である。明治17年の地籍図によると両街道とも道幅は3間であり（約5.5m、註6）、現在もほとんど変わっていない。それともう1つ、三差路に右道標が残されている。本稿ではこの道標について詳しく見ていきたい。

1. 追分道標の現況と由来

現在、追分三差路の北側にはキリスト教の教会「チャペル犬山」が建っている。その敷地西側、隣地との境界沿いに4本の石柱が密接して並べられているが、これらが道標である（写真3）。位置をもう少し詳しく述べると、三差路の北角から北西（稲置街道側）へ7mほど進んだ地点となる。2026年3月、チャペル犬山および隣地の地主の方に許可をいただき、道標群の調査を行った。感謝申し上げます。

石柱に南（道路側）から順に①～④の番号を付け、以下にそれぞれの

形状、大きさ、銘文を記す。

① 自然石、高さ60cm、東西25cm、南北24cm

【南】右きそ
左犬山
みち

② 不整形の角柱、高さ100cm、東西12.5cm、南北22.5cm

【東】追分交番所址

【北】昭和五十年一月嵯寿吉野：

③ 角柱、高さ80 cm、東西20.5 cm、南北22 cm

【南】(紋) 左三光神：

此より壹里十：

【東】 右善：

【北】 世話人：

【西】 伊勢國三重郡四日：

願主 富田屋

櫻井

④ 角柱、高さ40 cm、東西18 cm、南北18.5 cm

【東】 黒平山：

*「…」は埋没もしくは狭いために銘を読み取れない部分

*記載のない方角についても銘が隠れている可能性あり

これに加え、過去の文献に記録されている道標の銘文を示す。

『愛知県歴史の道調査報告書Ⅴ』
1991年、愛知県文化財課編

道標は高さ五六寸、幅二四寸の角柱の「右きそ左犬山みち」や「右善光寺左三光神社」「尾張富士道従是二十丁」「黒平山秋葉道」などがある。

『犬山の石仏・梵鐘』
1997年、横山住雄編（註7）

旧木曾街道の楽田追分三叉路には四基の道標が立っている。

明治二年五月、黒平山秋葉道、名古屋区政司町高橋仲右衛門、八寺町後藤勘助、

明治三十四年六月、尾張富士山従是二十丁、

（欠年月日）善光寺道、施主伊勢国三重郡四日市：世話人稲置村麻屋兵右衛門、

（欠年月日）右きそ、左犬山、である。

さて、道標1つ1つについて検討すると、まず②は道標ではなく「追分交番所」の跡地を示す標石である。これはかつて存在した「追分駐在所」（楽田北駐在所、図2）を記念するために個人が造立したものと

みられる。駐在所の位置は、字追分28番地の1にあり旧名古屋犬山街道の三叉路に位置する、との『楽田村史』の記述や地元の方の話から、現在の教会の位置であったようだ。昭和36年および40年に撮影された空中写真では現在の教会敷地と隣地にまたがる東西に長い建物が見えることから、図2は三差路付近から北側を撮影したものと推察される。この駐在所は昭和42年4月に廃止され（註9）、44年5月撮影の空中写真では建物が見えないことから、それまでに取り壊されたとみられる。

続いて③は記録における「右善光寺左三光神社」にあたるとみられる。年号はないようだが、稲置村（現・犬山市犬山）の名が見えることから同村が存在した明治5〜22年の期間に造立されたと考えられる。三光神社は現在犬山城の入口にある三光稲荷神社にあたる。江戸時代には城下の坂下中切村（願入寺南西付近）にあったが、明治9年に三光寺山へ移された。その後、昭和39年に現在地へ再度移転している（註10）。道標は神社や城下町へ人を呼び込む目的で造立されたものではなかろうか。また願主（寄進者）は富田屋の



図2 追分駐在所（1967年刊『楽田村史』より、註8）

櫻井氏なのか、富田屋・櫻井の両者なのか不明だが、四日市という遠方から寄進しているのが興味深い。

④は記録における「黒平山秋葉道」であろう。黒平山は入鹿池の東に広がる八曾山地の主峰（標高327 m）で、明治時代には宗岳寺という寺院が存在していた。秋葉信仰の寺として知られ、毎年12月の「秋葉の火祭り」は人々の信仰を集めて盛大に行われたという（註11）。道標はこの宗岳寺の参拝者のために造立されたものとみられる。ただし寺

の建立は明治11年頃とされ、また銘文中の「名古屋区」も明治11～22年に存在した行政区名であるため、明治2年という年号には疑いが残る。それはともかく、現在の黒平山には寺の存在を示す石垣や石碑がわずかに残るのみで、史料も乏しいため、この道標は忘れられた歴史を伝える貴重な存在といえる。

このほか、①と④の頂部にはすり鉢状の浅い穴が開いているのが認められる。これは人為的に開けられたもので、盃状穴（はいじょうけつ）と呼ぶ。国内外に広く分布し、この近辺では御日塚神社にある自然石や街道に面した寺社の手水石等でも見られる。穴を開けた意図については、何らかの信仰やまじないとする見方、子供の遊びとする見方が存在しているが、年代も含めてはつきりしたことは分かっていない。

最後に、記録ではもう1つ「尾張富士道」という道標の存在が示されているが、追分三差路では現在見当たらない。これについては第2・3節で述べる。

2. 追分道標の60年

現在、道標群は目立たず、案内標

識としてはほとんど機能していない状態である。しかし地元の方の話によれば、かつては街道からよく見えるように配置されていたという。筆者はその時代を知らないが、文献に掲載された写真で当時の姿を見ることができると。本節ではそのうちいくつかを紹介し、道標の変遷について見ていきたい。

まず図3のA（1970年頃）では道標が「尾張富士山道」を先頭に縦列に並んでいる。写真からは詳しい位置が分からないが、図2において駐在所の入口脇に立つ柱のようなものが道標にも見えることから、これと同じ位置、すなわち三差路から木曽街道を数m北上した地点ではないかと筆者は考えた。しかし地元の方の話によれば、道標は駐在所があった時代から三差路の北角に立っており、図2では画面外に見切れているとのこと。Aも同じく三差路角にあるのか、ほかの場所に移されていたのか、現時点では不明瞭である。続いてB～E（70年代後半～90年代初頭）では道標が間隔を空けて横並びになっている。向かって右から「尾張富士山道」、「黒平山秋葉道」、「右善光寺左三光神社」、「右きそ

左犬山みち」、背後に「追分交番所址」という配置になっていたとみられる。これも詳細な位置が分からないが、地元の方の話や後年の写真Hから、三差路の北角に立っていたと考えられる。これらの写真のうちDでは道標群全体がなぜか後ろに傾いており、これは同じ85年に刊行された別の文献の写真（註13）でも同様である。道路の突き当たりにあるため自動車が衝突してこのような形になったのではないかと筆者は想像するが、地元の方の話では特に事故の記憶はないとのことである。

続いてF～H（90年代半ば）では引き続き道標が横並びになっているが、向かって右端にあった「尾張富士山道」がなくなり、石柱が4本に減っているように見える。このことはFの説明文において「黒平山秋葉道」を「右端」と記していることによっても証される。またGでは「黒平山秋葉道」の下部に何かが取り付けられているように見えるが（図4）、これは近くに現存する「樂田城裏門旧跡」の石碑と同様、四隅に鉄骨をあて針金を巻く方法で補強を施しているものとみられる。事故等で損傷したのだろうか。

最後にI（2000年代）では道標が間隔を空けずに並べられた様子が見える。これはフェンスの有無などの違いはあるが、現在の道標群を東側から見た景観とほとんど同じである。チャペル犬山の方の話によれば教会の建物が完成したのは2001年とのことであるため、その頃に道標が現在の位置に並べられたと考えられる。ただし写真右端にわずかに見えているのが「黒平山秋葉道」だとすれば、現在はこれよりも背丈が低くなっているように思える。地表下の部分も含めて本来1mほどの長さがあると思われるこの道標が現状では地上40cmほどしかないことや、Gに見える補強の様子から、下部が完全に折れている可能性も考えられる。

3. 道標「尾張富士山道」のゆくえ

追分三差路にあった道標「尾張富士山道」がいつしか姿を消したことは前節で述べたが、それではこの道標は一体どうなったのだろうか。それについて、筆者が以前から気になっていたものがある。それはまさしく銘文に記された尾張富士のふもと、石上げ祭で有名な大宮浅間神社



E. 1991年刊『愛知県歴史の道調査報告書V』



A. 1970年刊『楽田 追分誌』



F. 1995年刊『犬山市史 通史編下』



B. 1978年刊『犬山 中学校社会科資料集』



G. 1995年刊「なごや懐古街道記8」



C. 1984年刊『ぼくらの愛知県』



H. 1998年刊『扶桑町史 上』(右下「'94. 12. 2」と印字)



I. 2008年刊『稲置街道散策まっぶ』



D. 1985年刊『歴史と文化のふるさと犬山』

図3 文献の掲載写真から見た過去60年の楽田追分道標(註12)



図4 石碑の補強の例
左…黒平山秋葉道 右…樂田城裏門旧跡



写真4 大宮浅間神社入口（道標は中央下）



写真5 道標「尾張富士山道」
(2026年3月)



写真6 美濃路と岩倉街道の
追分道標（清須市指定文化
財、註17）

指差しに従って右へ進むと尾張富士
の山道に通じるため、道標がここに

【右面】 明治廿四年六月建之 ふぢ区	【正面】 尾張富士山道	【左面】 従是二十丁
-----------------------	-------------	------------

角柱、高さ100cm、幅19.5cm、
奥行18cm

の境内入口脇に立っている石道標で
ある（写真4・5）。指差し記号の浮
き彫りの下に「尾張富士山道」と大
きく刻まれている。詳しくは以下の
通り。

あることに特に違和感はない。
しかしながら筆者はこの道標につい
て、以下の3点の理由からもともと
追分三差路にあったものである可能
性が高いと考える。

①銘文のうち「尾張富士山道」「従
是二十丁」の部分、『愛知県歴史
の道調査報告書Ⅴ』に記載された追
分道標の銘文とほぼ一致すること
（註14）

②この道標と過去の写真に見える追
分の「尾張富士山道」とを比較する
と、外形がよく似ていること

③現在の「尾張富士山道」と追分の
道標群との大きさの比率が、過去の
写真におけるそれとほぼ一致するこ
と

* 「尾張富士山道」：幅19.5cm
「黒平山秋葉道」：幅18.5cm

この道標がいつからここにあるの
か、また立てられた経緯について浅
間神社の宮司に尋ねたが、いずれに
ついても分からないとのことであつ
た。他方、道標が追分三差路から持
ち出された時期については図3に示
した過去の写真から推察できる。ま
ずEでは「尾張富士山道」が見えて
いるが、この文献は愛知県が平成2
年度に木曽街道の現況を調査した報
告書であるため、写真は1990（
91年の間に撮影されたものと考え
られる。また、F・Gでは「尾張富
士山道」がなくなっているとみら
れ、Hでもおそらく同様であるが、
F・Gの文献はいずれも95年3月の
刊行、Hは右下に94年12月の撮影を
示す印字が見える。これらの点か
ら、「尾張富士山道」は1990年
から95年3月の間、おそらくは94年
12月までに追分三差路から持ち出
されたと考える（註15）。当時どの
ような経緯があつたのか追分地区の
方に尋ねたが、持ち出しの事実も含
めて記憶にないとのことであつた。
この経緯については今後の課題であ
る。

さて、道標の銘文について検討す
ると、「従是二十丁」は「これより
20丁（2.2km）」という道程を意
味する。これは追分三差路から浅間
神社入口までの距離3.7km（34丁、
木曽街道と桜海道を経由した場合）
よりもかなり短い、古い道標は距
離の記載が不正確な場合も多いため

問題にはならないと考える。また右面の銘は明治34年6月に「ふぢ区」すなわち尾張富士ふもの富士地区が造立したことを意味すると考えられる。この年の石上げ祭（当時は旧暦6月1日の開催）に合わせて造立したことが想像され、また浅間神社関連の石造物は他地区の篤志家や講社によって寄進されたものが多くを占めるなかで、これは地元住民の手で造立したということも分かる。

この石上げ祭は明治から大正にかけて隆盛を極めたというが、それに伴う街道の混雑ぶりがうかがえる資料（新聞記事）をいくつか紹介したい（註16、読みやすくするため読点を追加した）。

『新愛知 明治41年6月30日』

「…即ち昨二十九日は有名なる尾張富士大宮浅間神社の石持祭であったので、二十八日の夜から登山した、当日は灰色の雲は一天に漲り、生憎の雨天であつたにも拘はらず、二人三人の同者連が東西南北より押し寄せてくる、ゴザを背負ふた者、握り飯を提げた者、十人十色のスタイルで足早やに並木を縫ふて行く、小富士土産の名物外良の本場、藤の

棚清流亭では盛んに外良を蒸してゐる、朝帰りの同者当込みである、久保一色を離なれると、左り手に田縣神社の杜がボンヤリ見たる…楽田村の中程に犬山へ岐れる追分がある、右方遙かの山巔に光!?星!?を認めたのは、是れ小富士山上に火祭をして樹梢に煌たる灯火を点じたのである、山脚を一大迂回して漸く麓に着いた…」

『新愛知 大正5年7月1日』

「…火振りが始まる頃から麓の田野、羽黒の村や近郷近在の人々が光の山と化した小富士を目がけて押寄せる、名古屋から来る小牧街道、美濃路、犬山より通ふ名古屋街道は草鞋脚絆に足を固めた参拝の人々が蟻のやうに続いた…」

地名などから、記事は木曾・稲置両街道の様子を述べているものと推察される。楽田追分も祭の人出でこつた返したとみられ、道標が必要とされた状況が想定できる。

おわりに

浅間神社の入口に立つ道標は楽田追分から移転したものではないか、

という数年前から抱いていた考えを話したところ、勧められて今回の記事を執筆することとなった。早速調査を進めると、思っていた以上に多くの文献で追分道標が取り上げられており、ここが街道の風情をよく残す場所、また街道の存在を分かりやすく伝えるのに適した場所とみなされてきたことがうかがえる。たしかに他地区では道標が移転していたり、その場に残っていても道路の形が変わっていたりして、資料を参照

しない限りその意味する所を正しく理解できない場所が少なくない。対して楽田追分では二股に分かれる道路の形が残っていて、道標も土地利用や事故?などの影響を受けつつも、そのほとんどが三差路の一角に立ち続けて地域を見守っており、街道を感覚的に理解できる場所となっている。これは非常に代えがたいことであると思う。

道標は各地で地域のシンボルとして扱われ、文化財指定されているものも存在する（写真6）。楽田追分の道標群についても、現在に至るまで保存されて来たことに敬意を表するとともに、これからも「追分」地区のシンボルとして大切にされるこ

とを期し、拙稿もその一助となれば幸いである。

最後に、調査や執筆にあたり以下の方々にご協力を賜りました。改めて深く感謝申し上げます。

（敬称略・五十音順）

追分地区の皆さん・尾張富士大宮浅間神社・鈴木伸太郎・チャペル犬山・服部哲也・望月友恵・山内勇夫

【註】

（1）愛知県教育委員会文化財課1999『愛知歴史の道調査報告書V・木曾街道・愛知県文化財調査報告書第60集』愛知県教育委員会

＊上街道、本街道、小牧街道、善師野街道、殿様街道などの異称がある。

（2）犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会1997『犬山市史 通史編上 原始・古代、中世、近世』犬山市

＊犬山街道とも呼ばれる。

（3）犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会1979『犬山市史 史料編1 近世絵図集』犬山市

（4）名古屋市教育委員会1967『名古屋叢書統編 第6巻 尾張街行記（3）』編者に同じ

（5）名古屋市蓬左文庫『名古屋叢書三編 第17巻 横井也有全集 中』名古屋市教育委員会 P356

名古屋市教育委員会1960『名古屋叢書 第19巻 随筆編（2）』編者に同じ P56

- (6) 『地籍図 丹羽郡学伝村』(愛知県公文書館所蔵)
- (7) 横山住雄 1997 『犬山の石仏・梵鐘 犬山の歴史散歩(二)』濃尾歴史研究所
- (8) 桑田村史編纂委員会 1967 『桑田村史』編者に同じ
- (9) 吉野深市 1970 『桑田 追分誌 明治百年記念』編者に同じ
- (10) 犬山市教育委員会歴史まちづくり課 2016 『犬山市の公共施設の変遷』(犬山市HPにて2026年4月15日閲覧)
*江戸時代後期には三狐神社、社宮司の社、ヲチャセンなどと称した(犬山里語記)。
- (11) 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会 1995 『犬山市史 通史編下 近代・現代』犬山市
- (12) A. 註9の文献 口絵
- B. 犬山市教育研究会 1978 『犬山 中学校社会科資料集』犬山市教育委員会 P75
- C. 松井貞雄 1984 『ぼくらの愛知県・郷土の地理と歴史』ポプラ社 P141
- D. 尾張文化研究会 1985 『歴史と文化のふるさと犬山』大正堂兼松書店 P66
- E. 註1の文献 P20
- F. 註11の文献 P71
- G. 鈴木一七子 1995 『なごや懐古街道記 8 “殿様街道”にたたずむ桜と石仏 木曾(上) 街道・上』『名古屋商工会議所月報 名古屋 3月号(559)』名古屋商工会議所 P33
- H. 扶桑町教育委員会・扶桑町史編集委員会 1998 『扶桑町史 上』扶桑町 P336

- I. 北区民まちづくり推進協議会 2008 『稲置街道散策まっぶ・名古屋城から犬山城』編者に同じ P31
- *このほか、筆者の知る限りでは以下の文献に桑田追分道標の写真(遠景含む)が掲載されている。
- J. 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会 1985 『犬山市史 別巻 文化財・民俗』犬山市 P507
- K. 愛知県社会科教育研究会尾張部会 1988 『尾張の文化財とくらし』浜島書店 P155
- L. 犬山市教育委員会 1993 『犬山市の文化財』編者に同じ P55
- M. 犬山市教育研究会 1993 改訂 『わたしたちのまち犬山』犬山市教育委員会 P81
- N. 中根洋治 1997 『愛知の歴史街道』愛知古道研究会 P107
- O. 愛知県社会科教育研究会尾張部会 2012 『尾張の街道 探訪尾張の歴史シリーズ第2集』浜島書店 P65
- (13) 註12の文献J
- (14) 『犬山の石仏・梵鐘』所載の銘文とは年月も一致しているが、この文献は1997年の刊行、すなわち「尾張富士山道」が三差路から持ち出されたとみられる時期より数年経過しており、何に基づいて銘を記載したのか不明瞭なため判断の根拠に用いることはできない。
- (15) このほか、1993年3～4月に刊行された註12の文献L・Mの写真でも石柱は4本しか見えないが、いずれも「黒平山秋葉道」のすぐ右で見切れているため「尾張富士山道」の有無は判断できない。
- (16) 「尾張富士 石持祭 雨中の壮観」『新

愛知 1908年6月30日 朝刊』新愛知新聞社 P5

「尾張富士の宵祭 満山の火光 石吊祭の始まる迄」『新愛知 1916年7月1日 朝刊』P4

(17) 文化財としての登録名は「美濃路道標」。

【参考文献】

- (1) 桜井芳昭 1997 『尾張の街道と村』著者に同じ
- (2) 鈴木一七子 2002 『なごや懐古街道記』志考社
- (3) 春日井市文化財友の会 2007 『木曾街道を歩く ひとり歩きのご案内書』編者に同じ
- (4) 街道研究友の会 2010 『古道277 kmと堀川の今 名古屋開府400年記念』新日本印刷
- (5) 犬山市教育委員会 2020 『尾張富士の石上げ祭調査報告書』編者に同じ
- (6) 増田修 2021 『美濃・尾張の石碑を訪ねて』産経新聞生活情報センター
- (7) 村上哲生 2023 『木曾街道の給水施設遺構』『水利科学 67巻3号』日本治山治水協会

犬山市・明治池古窯の踏査報告

愛知学院大学大学院 文学研究科 歴史学専攻 博士前期課程 一年 兼松 泰弘

1. はじめに

昨年度より、筆者は犬山市域で過去におこなわれた発掘調査等出土遺物の再検討や、赤色立体地図を活用した窯跡の踏査を通して、主に古代から中世における本市域の窯業生産の実態を明らかにしようと活動を続けている（兼松2025a・b）。

詳細は後述するが、本市域には既に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている窯跡が複数存在するものの、発掘調査事例が少なく、分布調査の記録・資料が残されている地点も必ずしも多いわけではない。そのため、宅地開発等で明らかに滅失しているものは除くが、残存の可能性がある窯跡については改めてその地点の踏査を実施することで、実態の解明に近づきたいと考えている。

本稿は、その一環でおこなった犬山市・明治池古窯（県遺跡番号・

050077）の踏査報告である。

本窯は『愛知県史（註1）』では「白瓷」が、『犬山市史（註2）』では「碗」が出土遺物として明記されているが、それ以外に本窯に関する記述はなく、実際の遺物も確認できないため具体的にどういったものが出土したのかは不明である。加えて、上述した2つの文献に掲載されている分布図をみると、僅かではあるがその位置にずれが認められる（第1図）。したがって、本稿では本窯の性格とその正確な位置を明らかにすることを目的したい。

2. 立地と周辺の遺跡

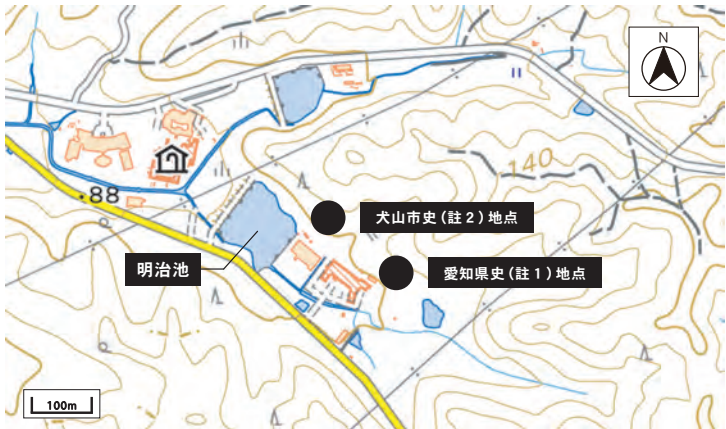
犬山市の東部には、標高130～200mほどの丘陵地（東部丘陵、愛岐丘陵などと呼ばれる）が広がっており、丘陵内には農業用として数多くの灌漑用ため池が造られている。その内の1つに「明治池」があ

り、本窯はその付近に所在するとされている。また、この周辺はちょうど丘陵地から平野部へと開けていく場所であり、標高は東から西へと次第に低くなっている。

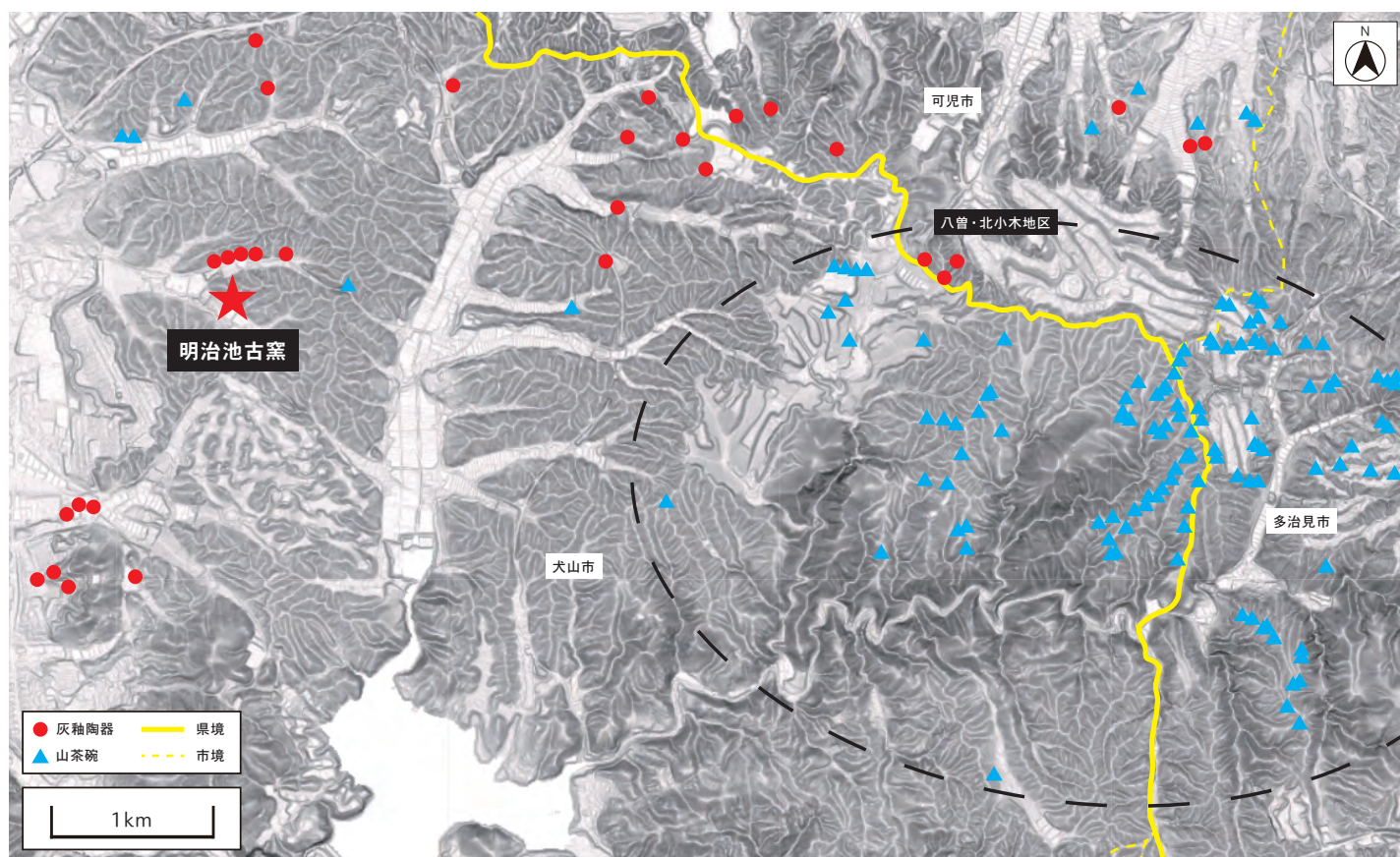
犬山市域には、東部丘陵内を中心に複数の窯跡が確認されているが、それらの多くは灰釉陶器、もしくは山茶碗を生産した窯跡である。灰釉陶器窯が平野部に比較的近い場所を中心に南北の分布が認められるのに対して、山茶碗窯は岐阜県境に沿うような東西の分布を示している。ただ、発掘調査がおこなわれた窯跡が少ないために詳細は不明で、本窯の南西方向に位置する「赤坂古窯跡群」の赤坂1～3号窯が貴重な発掘調査事例である（註3）。既に包蔵地となっている窯跡が約50基存在するが、これに加えて、近年の踏査によって発見されたものも存在する（大塚2020・兼松2025a）。

また、本市域は周辺を一大窯業生産地に囲まれており、南方の小牧市・春日井市には「尾北古窯跡群」（以下、尾北窯）が、北方の各務原市には「美濃須衛古窯跡群」（以下、美濃須衛窯）が、東方の可児市・多治見市には「東濃西部古窯跡群」（以

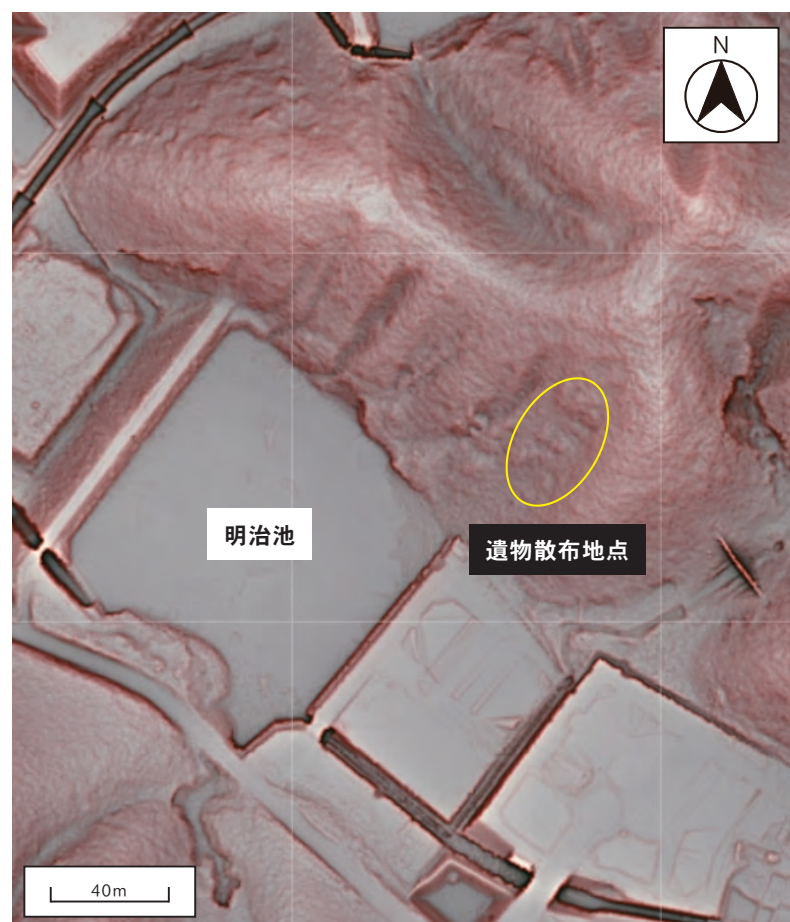
下、東濃窯）が存在する。尾北窯・美濃須衛窯は古代に、東濃窯は主に古代から中世にかけて活発に窯業生産をおこなっており、本市域を含めた尾張北部～中濃・東濃地域が、当時の東海地域における窯業生産の一翼を担っていたことがうかがえる。特に、東濃窯については東部丘陵と尾根続きの近接した場所に、同時期の窯跡の分布がみられることは注目しておきたい（第2図）。



第1図 各分布図における明治池古窯の位置



第2図 犬山市と岐阜県境付近の灰釉陶器・山茶碗窯跡



第3図 遺物散布地点周辺の地形図

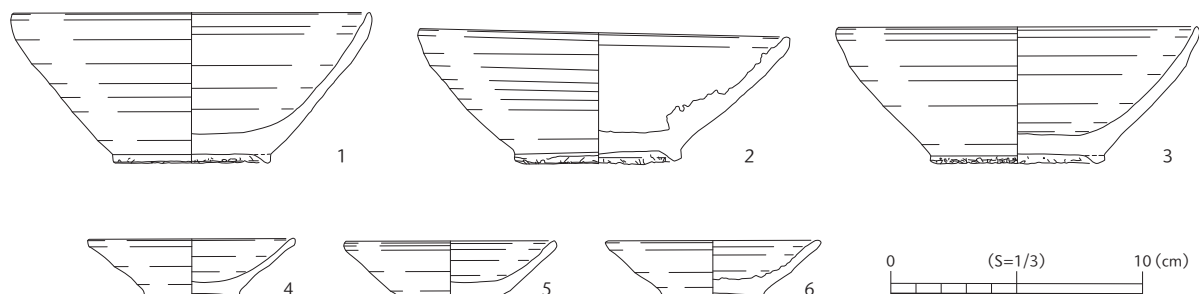
3. 踏査報告

① 現況

遺物の散布が確認できた地点は明治池の北東方向に位置しており、西から伸びる丘陵南側斜面の中腹付近の狭い範囲である(第3図)。この場所は、先に述べた『犬山市史(註2)』の分布図の位置とほぼ一致する。標高は約115mで、周辺は山林が広がっている。八曾地区でみられたような窯体の凹みや、前庭部の

② 採集遺物

採集遺物には碗と小皿があり、どちらもやや深い形状である。底部外面には回転系切り痕がみられ、平坦面といった地形の痕跡はほぼ認められなかった(兼松2025a)。確認できた遺物は、東海地域の代表的な中世陶器である山茶碗で、その中でも薄手で均質な胎土が特徴の「東濃型(註4)」山茶碗である。そのほかに、窯道具である焼台や窯壁と思われる破片も散布していた。



第4図 明治池古窯採集の山茶碗

実測図番号	注記	種別	器種	流量 (cm)			底部外面調整	焼成	色調	胎土	備考
				器高	口径 (残存率)	底径 (残存率)					
1	R80202 明治池-1	山茶碗	碗	5.9	14.1 (10%)	6.0 (90%)	回転糸切り痕	良好	灰白	極密・黒斑少	内面全体にうすく自然釉かかる
2	R80202 明治池-2	山茶碗	碗	5.4	14.6 (20%)	6.0	回転糸切り痕	良好	灰白	極密・黒斑少	内面全体に自然釉かかる・ボロ付着
3	R80202 明治池-3	山茶碗	碗	5.4	14.2 (30%)	6.3 (70%)	回転糸切り痕	良好	灰白	極密・黒斑少	外面褐色に焼きあがる
4	R80202 明治池-4	山茶碗	小皿	2.2	8.1 (45%)	3.8	回転糸切り痕	良好	灰白	極密・黒斑少	底部外面に板目状圧痕あり
5	R80202 明治池-5	山茶碗	小皿	2.2	8.3 (10%)	4.2	回転糸切り痕	良好	灰白	極密・黒斑少	外面全体と断面に自然釉かかる
6	R80202 明治池-6	山茶碗	小皿	2.1	8.3 (25%)	4.0	回転糸切り痕	良好	灰白	密・黒斑少	内面全体に自然釉かかる・ボロ付着

第1表 採集遺物観察表

体部から口縁部にかけては直線的である。碗については口縁部がやや内湾し、高台はどれも付高台で三角もしくはつづれた台形状で、端部には靱殻痕がみられる。東濃型山茶碗編年(註5)の5b、5c型式期に相当すると考えられ、実年代では12世紀末葉に位置づけられる(第4図・第1表)。

4. おわりに

今回の踏査によって、明治池古窯は12世紀末葉に東濃型山茶碗を生産した窯跡であることが明らかとなった。岐阜県境からやや離れ、平野部に近い場所に単独で築かれる立地は、これまでに踏査をおこなった八曽地区のそれとは大きく異なる。

隣接する東濃窯の動向をみると、当該期には窯数が著しく増加するとともに平野部から離れた急峻な山中にも窯が構築されるようになり、むしろ本窯のような立地の窯の方が少数派となっている。山内伸浩氏は、この山茶碗窯の「高地化」が原料(薪木・陶土)を求めた工人移動の結果のみでは解釈しきれない要因がある」と指摘し、その一例として多治見市の北小木地区を取り上げ、特に14世紀以降には永保寺の所領拡大と経営形態に影響を受けていたものと推測している(山内2008)。無論、犬山市域の山茶碗窯が永保寺の影響を受けているとは現状考えにくい。ただ、改めて第2図をみると、八曽地区と北小木地区が当時の一体的な窯場であることは明らかであり、北小木地区を含めた東濃窯の動向に、本市域のそれは大きな影響を受けている(与えている)可能性が高い。なお、これについては可児市境付近の灰釉陶器窯についても同様の可能性が考えられ、近年では大西遼氏による指摘がある(大西2019)。

最後に、今回の踏査成果は本市域の山茶碗窯跡が東濃窯に近接した県

境付近に集中するのみではなく、東部丘陵内の広範にわたって分布している可能性を示唆するものであった。今後も継続して踏査をおこない、その実態を明らかにすべく活動を続けていきたい。

【謝辞】

本稿の作成にあたり、以下の方々には現地の状況・採集遺物の所見についてご教示いただきました。記して感謝いたします(50音順・敬称略)。
岡本直久・中野耕司・中野晴久・水野領介・山本智子

【註】

- 1 愛知県史編さん委員会(編)2015『愛知県史別編 窯業1 古代猿投系』愛知県
- 2 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会(編)1983『犬山市史史料編三 考古古代・中世』犬山市
- 3 そのほかにも、時代は下るが犬山焼を生産した「丸山窯」も発掘調査がおこなわれている。
- 4 「東濃型」とは山茶碗の一類型である。その生産の中心は可児市や多治見市、土岐市といった東濃地域であるが、愛知県側の犬山市や春日井市の内津地域、瀬戸市北部といった一部の隣接地域においても東濃型山茶碗を生産した窯跡が確認されており、それらも東濃窯の範疇に含まれている(山内2008・藤澤2018など)。
- 5 山本智子氏が掲示した編年に依った(山本2020)。

【引用・参考文献】

大塚友恵 2020 「犬山市・宮裏地採集の灰釉陶器について」『研究紀要 遡波』第7号、NPO法人古代遡波の里・文化遺産ネットワーク、21―25頁

大西 遼 2019 「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ―猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査―（付）美濃・伊勢の窯跡出土須恵器」『愛知県陶磁美術館研究紀要』第24号、72―85頁

兼松泰弘 2025a 「赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見―犬山市八曾地区を事例に―」『研究紀要 遡波』第12号、NPO法人古代遡波の里・文化遺産ネットワーク、26―39頁

兼松泰弘 2025b 「犬山市・赤坂2号窯出土の灰釉陶器・山茶碗について」『令和7年度考古学フェア』『あいちの考古学 2025』『発表資料集』公益財団法人愛知県教育・スポーツ文化振興財団 愛知県埋蔵文化財センター、19―20頁

多治見市文化財保護センター（編） 2002 『多治見市詳細遺跡地図』多治見市教育委員会

長瀬治義・田口昭二 2005 「第二部 窯業」『可児市史 第一巻 通史編 考古・文化財』可児市、399―640頁

藤澤良祐 2018 「東海地方における中世窯の消長―中世前半代の様相を中心に―」『東海窯業史研究論集Ⅰ』東海窯業史研究会、1―34頁

山内伸浩（編） 1991 『北小木古窯跡群発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第28号、多治見市教育委員会

山内伸浩 2008 「東濃地域における灰釉陶器・山茶碗生産の様相―窯の分布とその変遷からの視点―」『日本考古学協会 2008 年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会、533―547頁

山本智子 2020 『中世東濃窯の研究』愛知学院大学大学院博士論文

【挿図・表出典】

第1図 地理院地図電子国土Webに加筆作成

第2図 地理院地図電子国土Webに加筆作成。位置は大塚2020、兼松2025a、多治見市文化財保護センター（編）2002、長瀬・田口2005、マップあいち（愛知県統合型地理情報システム）愛知県文化財マップ埋蔵文化財 記念物 (<https://maps.pref.aichi.jp/map/view/mapjsp?mid=20055>) を参照

第3図 マップあいち（愛知県統合型地理情報システム）森林情報マップ (<https://maps.pref.aichi.jp/map/view/mapjsp?mid=21378>) に加筆作成

第4図 筆者作成

第1表 筆者作成

官林瓦窯採集遺物の整理と二〇二五年度踏査成果報告

名古屋大学大学院 人文科学研究科 博士前期課程 二年

伊藤 佑真

1. はじめに

官林瓦窯は、木曾川の左端、小牧台地の西端部である犬山市犬山字官林に位置するとされ（図1）、現状は森林である（梶原2010a）。発掘調査はなされていない



図1 官林瓦窯推定位置図

ものの、周辺域では多量の古代瓦を中心とした遺物の採集がなされており、それらに着目した研究も数多く見られる（岩野1977、梶山2000・2005、梶原2010b・2017・2023・2024）。しかし、官林瓦窯の詳細な所在地は現在もなお不明で、周知の遺跡登録地点にはズレが生じている可能性も指摘されている（公益財団法人日本モンキーセンター2021）。また、採集遺物についても、網羅的な報告はなされていない。そのため、本稿では、官林瓦窯周辺域で従来採集された遺物を再整理すると共に（第2章）、官林瓦窯の所在地を特定すべく実施した遺跡存在予測と（第3章）踏査成果について、報告を行なう（第4章）。

2. 採集遺物の再整理

官林瓦窯推定域では、多量の瓦と数点の土器が採集されている。以下にその概要を示す。

軒丸瓦

素文縁の単弁蓮華文を持つ軒丸瓦である（図2-1）。周辺地域（丹羽郡・春日郡）に同文瓦の分布が見られ（御土井廃寺、伝法寺廃寺、白山瓦窯、川井薬師堂廃寺、下田南遺跡）、特筆される。確認されている個体の残存状況は良好でないものの、推定瓦当径は14.9cmで、蓮弁数は八弁と想定される。丸瓦の接合部分では、布目の転写が見られることから、少なくとも接合丸瓦先端の凹面側は未加工であったと考えられる。色調は灰白色（2.5Y 8/2）を呈し、胎土は小石（0.3〜0.5cm大）を1〜2個含む緻密な砂粒で、焼成はやや軟質である。1点確認された。また、1点のみ接合丸瓦と推定される個体も確認された（図2-2）、資料状況が不良のため、詳細な調整方法については不明である。

軒平瓦

直線頸の三重弧文軒平瓦である

（図2-3）。平瓦部は粘土板桶巻作りで、凸面には、微細であるが縄叩き痕を残す。瓦当部は、平瓦よりさらに分厚くなるよう補足粘土が凹凸両面に加えられているが、粘土の補足が平瓦の分割前であるか、分割後であるかは、瓦当部及び破面の摩滅過多、そして側面のケズリ調整により明確な判別がつかなかった。色調は灰白色（2.5Y 8/2）を呈し、胎土は小石（0.3〜0.5cm大）を1〜2個含む緻密な砂粒で、焼成はやや軟質である。1点確認された。

平瓦

平瓦は、凸面調整などから四つの型式に分類される。

・I型式

凸面に中程度の縄叩き（縦0.8cm前後×幅0.4cm前後）を全面に残す粘土板桶巻作りの一群である（図2-4）。叩きの方向は、左肩上がりの円弧を描く。凹面は布目痕を残し、胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒である。焼成はやや軟質で、色調は灰色？にぶい黄橙色を呈する。56点確認された。

・II型式

凸面に中程度の縄叩き（縦0.8cm前後×幅0.6cm前後）をやや粗

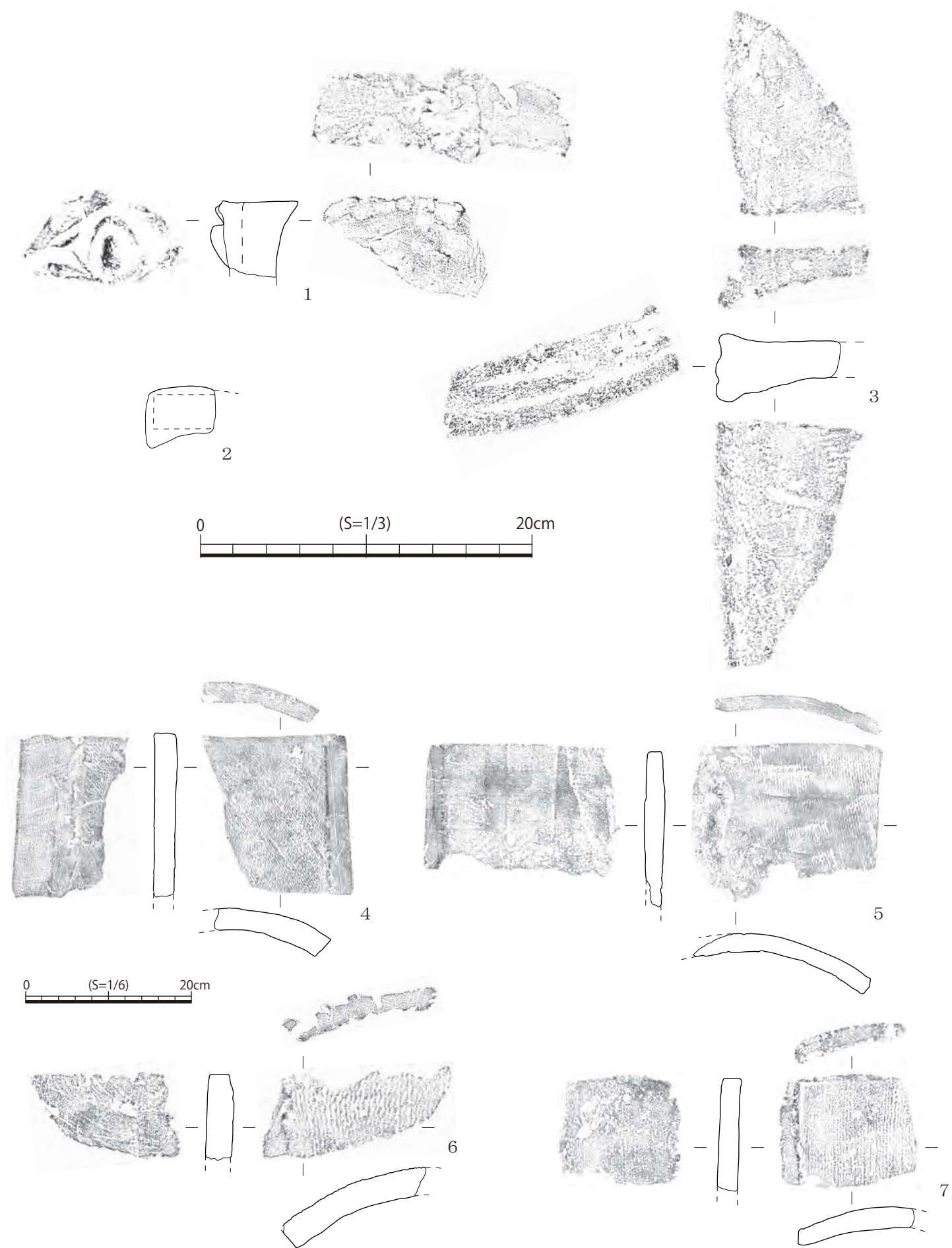


図2 官林瓦窯 採集瓦①

(1 ~ 3 : S=1/3、4・5 : S=1/6、6・7 : S=1/4)

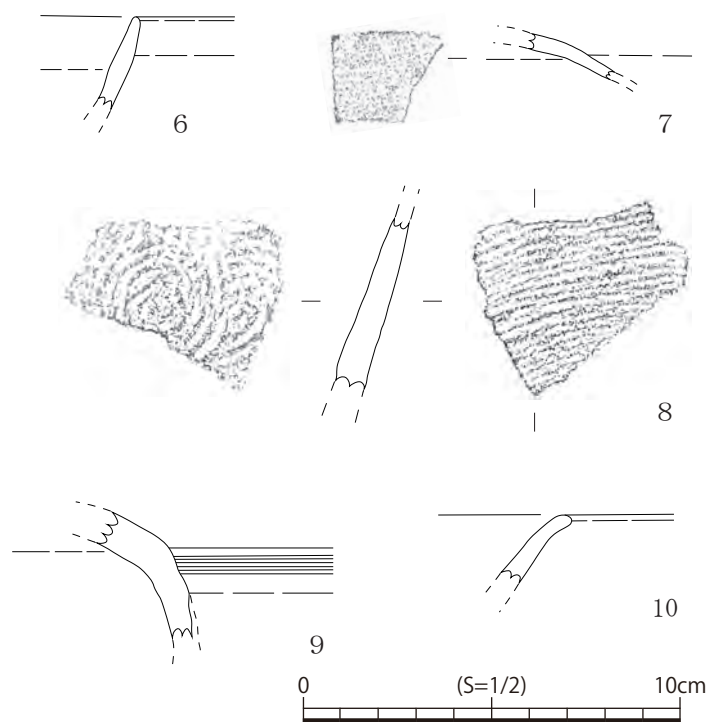
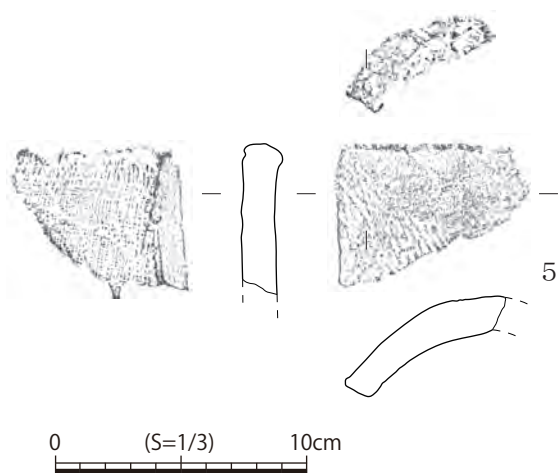
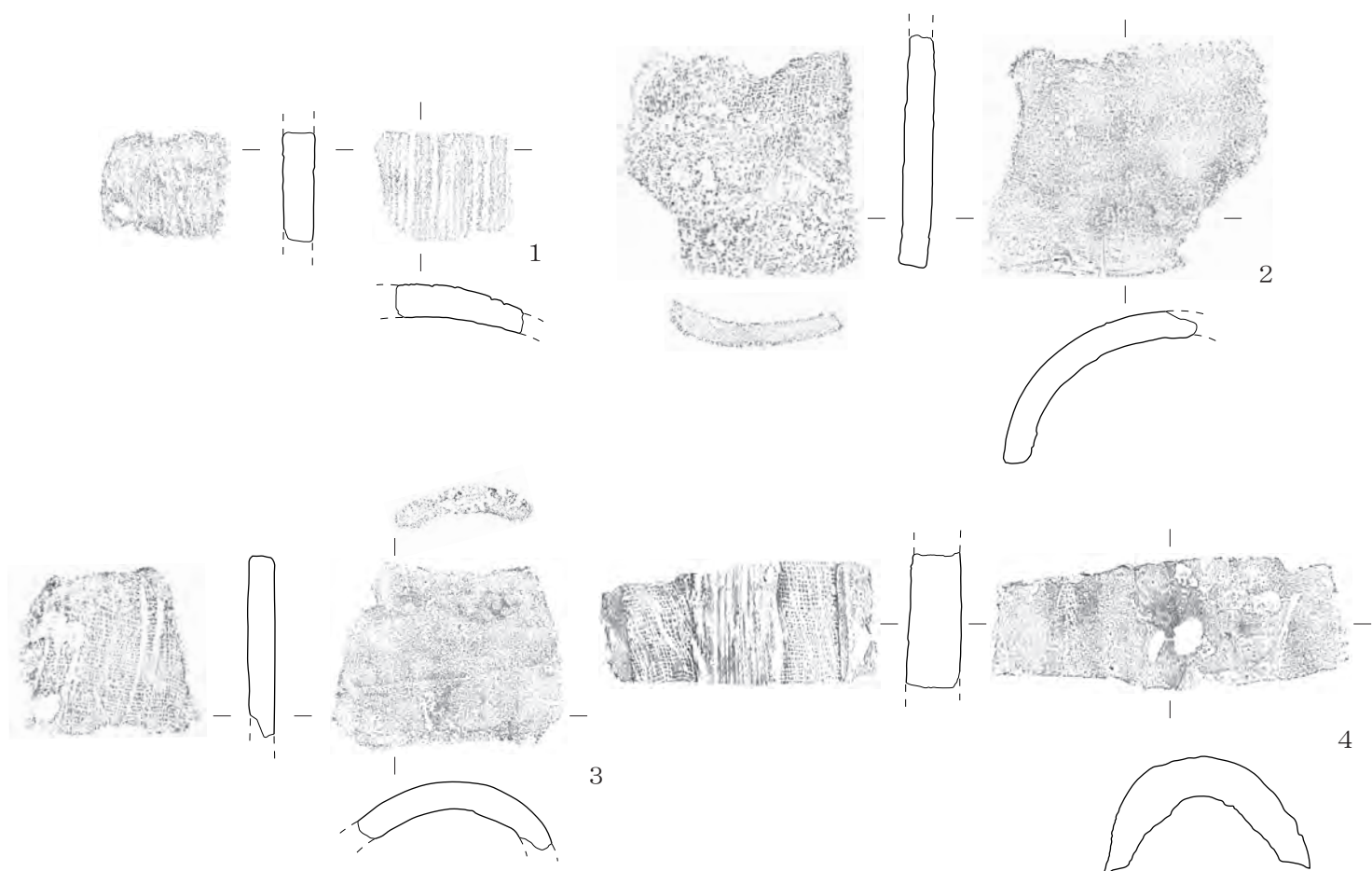


图3 官林瓦窯 採集瓦②・採集土器

(1 ~ 4 : S=1/4、5 : S=1/3、6 ~ 10 : S=1/2)

く残す粘土板桶巻作りの一群である(図2―5・6)。一部個体では、やや強い叩きと粗いヨコケズリが施される。凹面は布目痕を残し、胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒である。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。99点確認された。

・Ⅲ型式

凸面に細い縄叩き(縦0・6 cm前後×幅0・5 cm前後)を残す粘土板桶巻作りの一群である(図2―7)。

この型式では、凸面に離れ砂を留める個体がいづらか確認され、側面付近に凸線となる立ち上がりが見られるものもあることから、凹型成形台の使用が認められる。凹面は布目痕を残し、胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒である。焼成は硬質で、色調は灰色? 橙色と多様である。27点確認された。

・Ⅳ型式

凸面に太めの縄叩き(縦0・8 cm前後×幅0・75 cm前後)を残す粘土板桶巻作りの一群である(図3―1)。凹面は布目痕を残し、胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒である。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。2点確認された。

丸瓦

丸瓦は、平瓦に比して採集点数・型式数が少ないが、凸面調整などから、2つの型式に分類される。

・Ⅰ型式

凸面に中程度の縄叩き(縦0・8 cm前後×幅0・4 cm前後)後、ナデ調整を施す粘土板一木模骨作りで無段式の一群である(図3―2・3)。

凹面は布目痕と側板痕を残し、胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒である。焼成は硬質で、色調は黄褐色である。42点確認された。

・Ⅱ型式

凸面に縄叩き後、ナデ(ケズリ)調整を施す粘土板一木模骨作りで有段式である(図3―4)。凹面は布目痕を残し、凸面側には釉が多量に付着している。胎土は小石を含まない緻密な砂粒である。焼成は硬質で、色調は色を呈する。1点のみ確認された。この製品は、周辺に所在する勝部廃寺及び神宮寺跡で出土するものと同一製品で、混入の可能性もある。

・Ⅲ型式

凸面に中程度の縄叩き後(縦0・6 cm前後×幅0・6 cm前後)、ナデ調整を施す粘土板一木模骨作りで無段

式である(図3―5)。凹面は布目痕を残し、狭端面は未加工で茎痕が見られる。胎土は小石をあまり含まない緻密な砂粒で、焼成は軟質、色調は灰白色を呈する。1点のみ確認された。この製品は、勝部廃寺で出土するものと同一製品と目され、未注記であることから、こちらについても混入の可能性がある。

・土器

土器は総じて6点採集されており、その内、古代のものは5点確認された。

・須恵器

坏の口縁破片1点(図3―6)、ヘラ書きを一部残す蓋の破片1点(図3―7)、甕の胴部破片1点(図3―8)、壺もしくは瓶類の破片1点(図3―9)が確認された。いずれも小片のため、詳細は不明である。

・灰釉陶器

口縁破片が1点(図3―10)確認された。こちらも小片の為、詳細は不明である。

小結

採集遺物について、瓦は軒丸瓦・軒平瓦が1点ずつの確認であるも、平瓦は複数の型式が存在することから、複数の瓦工人集団(単位)

が瓦生産に従事したことが想定される。しかし、これが同時期の所産であるのか、異なる時期の所産であるのかは、現段階で判別できなかった。また、土器は、瓦に比してごく僅かの確認であることから、生産品であるとは考えにくい。ここでは、駿河の宮川瓦窯でも指摘されるような、瓦工人自身へ供されたもの(静岡県教育委員会1989)であると想定しておく。

3. 官林瓦窯の推定位置予測

2020年度に赤塚次郎氏を研究代表とした官林瓦窯の踏査が行なわれている。その報告によると、I…周知の遺跡として登録されている瓦窯の位置がズレている可能性が高いこと
II…現場は人為的な改変が進んでおり、表採資料等による遺構存在の認定には至らないこと
III…(過去の)遺物採集地点付近は、礫を多く含む地質であり、瓦窯の構築に適していないこと
IV…地形の状況及び、後世の改変から、谷の東側斜面が今後の調査対象となること
が示されている(公益財団法人日

本モンキーセンター2021)。これらから読み取れるように、踏査のみでは困難を要する状況である。

官林瓦窯の位置予測

近年、高解像度の航空レーザー測量データ等を用い、地形解析や人工知能の技術を導入することで、遺跡の存在を予測する研究が進展している(山口2025)。窯跡の存在予測は、古墳や城の縄張り図の検討事例に比して低調であるものの、赤色立体地図を用いた検討で一定の成果が見られる(兼松泰弘2025 a・b)。ここでも、赤色立体地図による存在予測を行ない、踏査前のアタリを付けるとともに、窯跡存在予測の一事例提示として、その内容を列記する。予測に際しては、全国Q地図(国土地理院測量成果)で公開されている、MPI 赤色立体地図(DEM1A)を用いた。

瓦窯構造の予測

東海地域の7世紀後～末における瓦窯構造(瓦陶兼業窯を含む)を鑑みると(考古学研究会東海例会・窯跡研究会2016、小林2025、東海埋蔵文化財研究会1992)、基本的には地下式もしくは半地下式の窖窯が見られる。し

かし、瓦窯においては地下式のものや圧倒的に多いことから(千葉2024)、官林瓦窯は地下式の窖窯が強く推定される。しかしながら、半地下式の窖窯である可能性も十分考えられ、以下の項では、この両構造を念頭に置く。

赤色立体地図の窯跡認定の条件

赤色立体地図に窯跡が映る条件については、兼松氏による検討が注目される(兼松2025 a・b)。まとめると、自然的・人為的改変があることを前提とし、①窯が築かれた位置、②窯の構造、の項目別に条件が提示されている。①では、窯跡の位置と植生が、②では、地下式の窖窯の場合において見られる天井崩落に伴う凹みと、前庭部および窯体に隣接して造成された平坦面の存在が示されている。また、「半地下式の場合、丘陵の斜面を掘りくぼめた土を利用して天井を造り付けたとするならば、天井が崩落した際にその土は元々あった場所へ戻るわけであるから、その時点で凹みはほとんど発生していない可能性がある。」(兼松2025 b 17頁)との重要な指摘もなされている。しかし、赤色立体地図上に反映される凹凸は、

過去に湧水地であった部分が崩落したものでも見られるように(戸田2014)、地形上の凹凸を一概に窯跡と認定するには限界がある。そのため、踏査に際するアタリとして、仮に、官林瓦窯が地下式、もしくは半地下式であることを前提とし、7世紀後～末頃の瓦窯として広く見られる規模である、5 m前後の凹凸を対象に、赤色立体地図からの検討を進めていく。

赤色立体地図を用いた検証

先の前提を念頭に、赤色立体地図上の官林瓦窯の所在が推定されるエリア概観すると、A～H地点の凹凸が抽出される(図4)。A地点の凹みはやや規模が大きいも、周辺地形には見られない凹みであることから、対象とした。

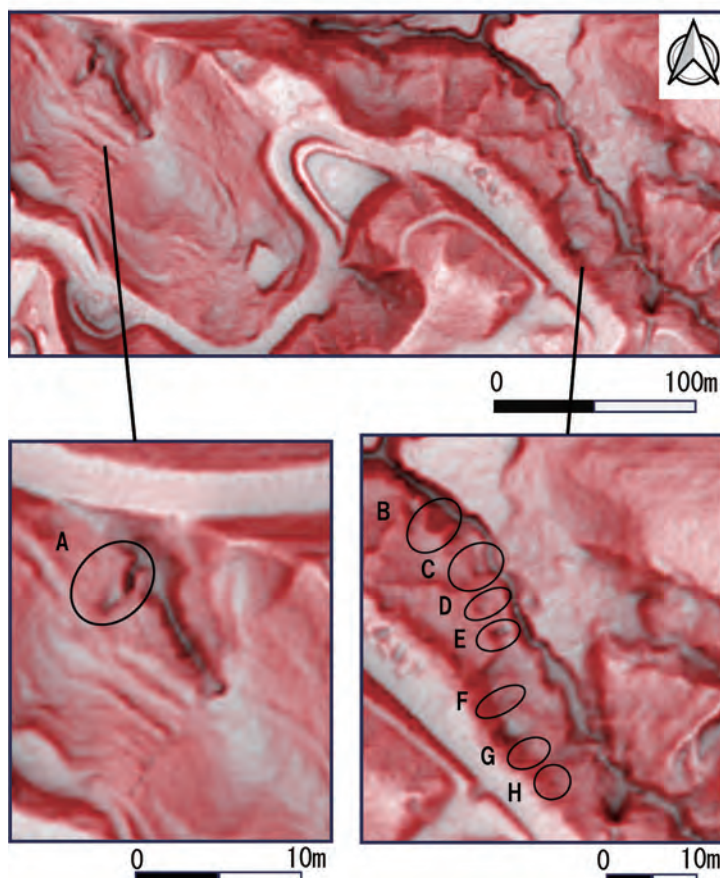


図4 官林瓦窯 予測位置図

4. 官林瓦窯の踏査成果

先の、官林瓦窯推定地点を元に、日本モンキーセンターの高野智氏よりご助力を賜わり、当該エリアの踏査を2026年2月19日（木）に実施した。すると、A地点では、排水管とそれに伴う排水による流路が、B～H地点では、地形の凹みが確認されたものの、遺物や窯の操業に伴う灰や黒色土、窯壁等の窯体構築物の検出は一切無く、いずれも窯跡認定の根拠に足る情報は一切確認されなかった。これらから、赤色立体地図による窯跡検出の難しさと、実地調査の重要性が改めて実証される結果となった。そのような中、従来の報告では、A地点付近で官林瓦窯の存在が想定されることもあったため（梶山1992）、これを基に、A地点の尾根奥を中心に再度踏査を行った。すると、集中的に瓦の散布が見られる地点が検出された（図5）。採集地点から読み取れるように、かなり限られたエリアで集中して瓦が採集されたことが分かる。ここから、官林瓦窯の存在が強く想定されるエリアを絞り込むことができ、従来の指摘のように、官林瓦窯

の遺跡登録地点にはズレがあると言える。ここで、採集遺物について概要を示す。採集遺物は、軒丸瓦1点、平瓦12点、丸瓦1点であった。軒丸瓦は（図6―1）、瓦当文様部が剥離しており、従来採集の軒丸瓦と同型式であるかは不明である。また、平瓦（図6―2～4）・丸瓦（図6―5）においても、凸面は摩滅過多により詳細な叩きや調整方法は不明であるが、凹面はほとんどの個体で布目痕が確認される。これら採集遺物は、胎土・焼成の様相が従来の採集遺物に酷似しており、特筆されよう。最後に、図5で示した枠内の地形図も合わせて掲載する（図7）。

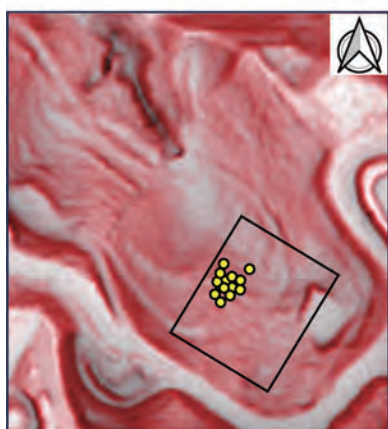


図5 官林瓦窯 遺物採集地点

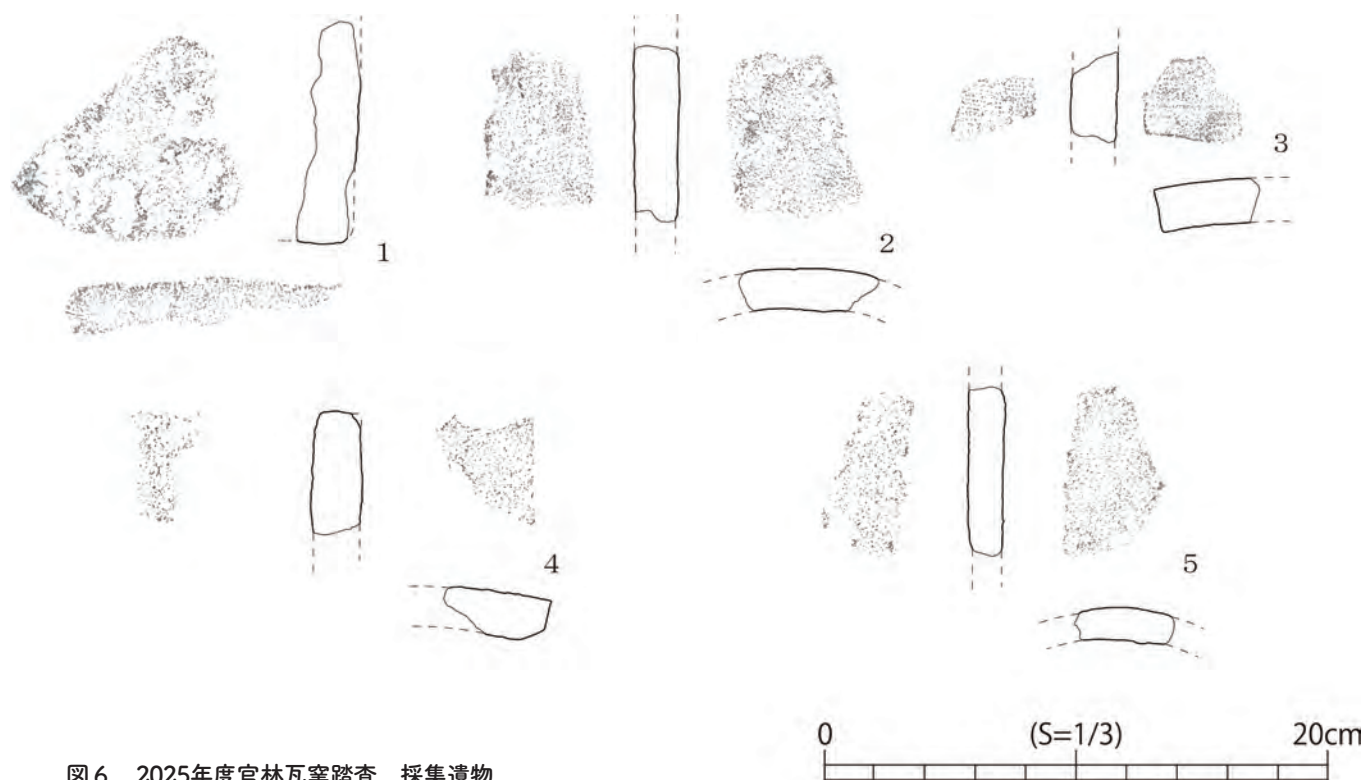


図6 2025年度官林瓦窯踏査 採集遺物

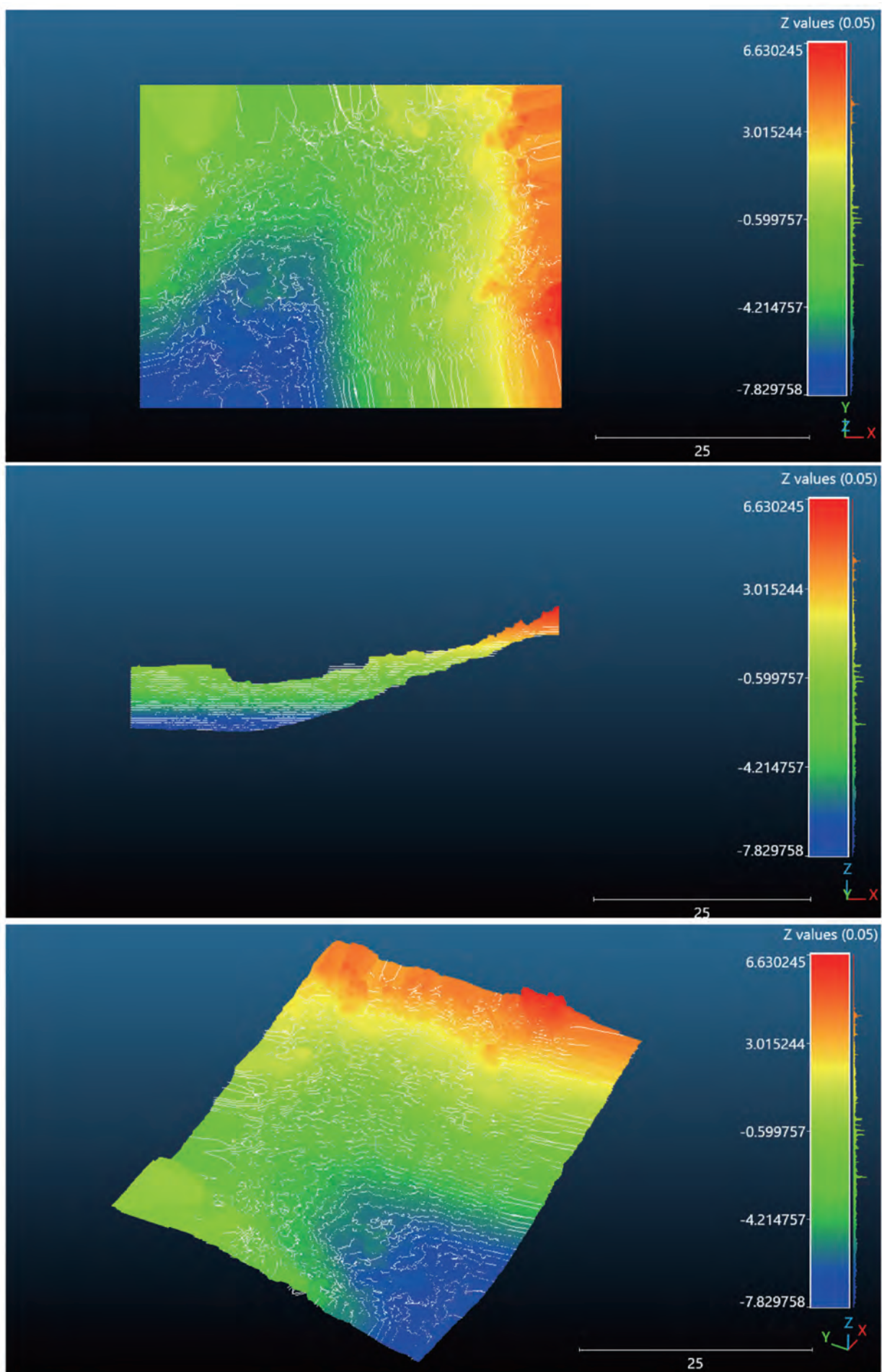


图7 遺物散布地周辺 地形図

5. おわりに

以上、官林瓦窯周辺域で従来採集された遺物を再整理すると共に（第2章）、官林瓦窯の位置を特定すべく実施した存在予測と（第3章）踏査成果について報告を行なった（第4章）。以上の成果は、官林瓦窯の所在を考える上で、重要な指針となる。官林瓦窯は、尾張でも数少ない古代の瓦窯であると共に、供給先は不明であるも、周辺地域の瓦生産を考える上で特筆すべき遺跡と言える。今後も継続的に調査を実施し、官林瓦窯の実態解明に向けて検討を行なう。

謝辞

本検討・踏査にあたっては、日本モンキーセンター高野智氏、名古屋大学大学院人文研究科の梶原義実先生、中川朋美先生、古尾谷知浩先生、三重大学文学部の金田明大先生、ニワリネットの望月友恵氏、犬山市教育委員会の中野拳弥氏、愛知学院大学文学部の兼松泰弘氏よりご指導・ご助力を賜った。また、踏査にあたっては、名古屋大学大学院人文研究科の小出一磨氏、高本

涼平氏、同大学文学部の大橋一心氏、日下部亜虹氏、清水遙陽氏、三谷聡大氏、愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科の堀敬斗氏にもご助力いただいた。末筆ながら、心より感謝申し上げる。（所属は全て踏査時）

【参考文献】

- 岩野見司1977「第5章 考古学から見た古代」『新編一宮市史』本文編 上一宮市131―150頁
- 梶山 勝1992「官林瓦窯」『古代仏教東へ―寺と窯―』1・寺院編 東海埋蔵文化財研究会179頁
- 梶山 勝2001「尾張の坂田寺式軒丸瓦をめぐる2・3の問題」『名古屋博物館研究紀要』第24巻 名古屋博物館1―12頁
- 梶山 勝2005「尾張の坂田寺式軒丸瓦」『古代瓦研究』Ⅱ・山田寺式軒瓦の成立と展開 古代瓦研究会編 奈良文化財研究所300―307頁
- 梶原義実2010a「官林1号窯・官林2号窯」『愛知県史』愛知県87頁
- 梶原義実2010b「国分寺瓦の研究」名古屋大学出版会
- 梶原義実2016「愛知県（尾張地域）の瓦窯の構造」『中部地方の瓦窯の構造・瓦窯の構造研究6』考古学研究会・窯跡研究会105―119頁
- 梶原義実2017「古代寺院の造営と景観」吉川弘文館
- 梶原義実2023「尾張国の官衙・寺院と窯業」『東海の古代官衙・寺院と窯業生産』地域と考古学の会39―50頁

梶原義実2024「河川交通と官衙・寺院・手工業」『古代官衙遺跡と五条川』岩倉歴史講演下田南遺跡発掘調査成果報告会10―13頁

兼松泰弘2025a「赤色立体地図の活用による山茶碗窯跡の発見」『犬山市八曾地区を事例に』『邇波』第12号 NPO法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク26―39頁

兼松泰弘2025b「赤色立体地図を活用した山茶碗跡の発見」『東海の歴史考古学最新線』若手考古学者を中心に 考古学研究会東海例会11―18頁

公益財団法人日本モンキーセンター2021『年報』令和2年度

考古学研究会東海例会・窯跡研究会2016『中部地方の瓦窯の構造・瓦窯の構造研究6』

小林新平2025「東海地域における瓦窯の構造と生産体制」『瓦生産から見た地域社会』古代瓦研究・窯跡研究会23―34頁

静岡県教育委員会1989『静岡県の窯業遺跡』

千葉太朗2024「瓦窯の基本用語整理と構造分類」『瓦窯の構造研究』窯跡研究会編 真陽社29―40頁

東海埋蔵文化財研究会1992『古代仏教東へ―寺と窯―』2・窯跡編

戸田堅一郎2014「曲率と傾斜による立体図法（CS立体図）を用いた地形判読」『森林立地』第56巻第2号75―79頁

山口欧志2025「未知の遺跡を把握する研究の現状と課題」『月刊文化財』8月号743号 文化庁監修 第一法規株式会社16―19頁

【図版】
図1…国土地理院地図の標準地図に筆者加筆

図2・3・6…筆者作成

図4・5…全国Q地図（国土地理院測量成果）のMPI 赤色立体地図（DEM1A）に筆者加筆

図7…金田明大氏作成のデータを筆者編集

昨年度のイベントチラシ一覧です！

しだみゅー歴史講演会
年間スケジュール

青塚古墳を見守る会
清掃ボランティア活動



第15回 青塚古墳まつり



歴史講座「入鹿切れ ―語りと読み聞かせで学ぶ―」



第37回 猪之子座
「年金トリオー座公演」



青塚子ども学芸員・子ども教室



夜の音楽会 in しだみ古墳群7
「天空のテノール」



第 16 回 漣波史楽座
「青塚古代音楽絵巻 第 8 章」



第 38 回 猪之子座
「旭堂南海の上方講談をたっぷり 11」



第 39 回 猪之子座
「上方落語九雀亭 10」



浅田稔絵画個展
トークライブコンサート



第40回 猪之子座
「美しき日本の音楽コンサート」



第 41 回 猪之子座
「琵琶演奏会」



しだみゅー歴史講演会
「古墳葬送儀礼の諸問題 ―食物供
献儀礼を中心に―」



東之宮古墳土あげ祭プロジェクト



しだみゅー歴史シンポジウム
「土器から考える古墳時代」

NPO 法人
古代遼波の里・
文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)
〒484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園
ガイダンス施設
〒484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

《ニワ里ねっと HP》▶
<http://niwasato.net/home>

《木之下城伝承館・堀部邸 HP》
<http://horibetei.com>

SNS でも情報発信しています。
《facebook、X、instagram》



【ニワ里ねっと会員募集】

ニワ里ねっとの活動にご参加・ご支援していただける方を
広く募集しています。

〈賛助会員 又は 正会員〉

個人・団体：1口 3,000円から

- ・賛助会員は事業企画への寄付を前提（総会議決権を放棄）。会報の送付を含めて、他は正会員と同じです。
- ・正会員は「総会」への出席をお願いいたします。

〈入会の流れ〉

- 1) 青塚古墳ガイダンス施設の窓口で受付
申込書に必要事項をご記入いただき、年会費を添えてお申し込みください。
- 2) お振込（郵便振替口座）による受付
新規会員様は通信欄に「新規賛助会員費」又は「新規会員費」、住所・氏名等を必ずご明記ください。
手数料は各自ご負担をお願いいたします。振込確認後、ご住所に会員証などを送付いたします。

【郵便振替口座】

口座番号 00850-9-198552
口座名称（漢字） 特定非営利活動法人 古代遼波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称（カナ） トクヒ コダイニワノサト ブンカイサンネットワーク

〈ご案内〉

- ・会員期間は5月の総会から次の総会日までの一年間
- ・口座振込確認後、ご住所に会員証等を送付させていただきます。
- ・「会報 さとの四季だより」を年6回程度配布。ニワ里ねっとが実施する事業などの情報をご案内します。
- ・会員証に「参加印」をためると、オリジナルグッズをプレゼント！

上記口座にて、寄付金も受付けております。

ニワ里ねっとの活動へのご支援をお願い申し上げます。

私たちと一緒に、
文化遺産を活かした
まちづくり活動に
参加してみませんか？

研究紀要 第13号

niwa 遼波 

《編集》

望月友恵 兼松泰弘

《発行》

NPO 法人
古代遼波の里・文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

令和8年5月16日

